

平成27年(西暦2015年)11月

### 瞑想録(その9)

滝沢 無縛(たきざわ むばく)

本論は私の日々の瞑想の結果をまとめたものです。私のライフワークは、狭い意味では連続体の神秘をアニミズム的多神教で瞑想する、「連続体と蓋然論理」です。最近により広範に、「人間とは何か、自分とは、そして宇宙とは」と言う観点を、科学ではなくまた学問でもなく、専ら瞑想で追い求めています。そのためのキーワードは「素朴な疑問」と「意外な気付き」です。つまり真の知恵について瞑想しています。瞑想であるという特性上、根拠をこれ以上提示できない言明やトンデモと言われそうな見解も含まれていますが、世の中科学で証明された決まりきったことだけではつまらないでしょう。私自身、「つまらない事実よりも出来の良い冗談の方が面白い」と言う立場で居ます。ですから、あくまでも新提案部分を肯定的に拾ってあげるつもりで見てください。その上で本文の言明を信じるか信じないか、それは読者一人一人に委ねられています。私は死後の世界に恐れはないですし墓も要らないのですが、あたかも墓誌銘には、“He loved freedom. He meditated for interest. And he lived a pleasant life.”と書いてほしいと願っています。なお、この論集の基礎となる先立つ瞑想録については、下記のサイトを参照してください。

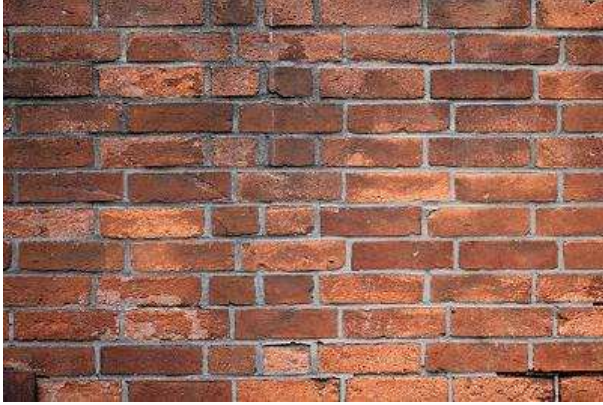
<http://www.geocities.co.jp/bimromav13/>

2015. 09. 09

### 1、アナログ数字の態様

現行の数学は、「連続な事物は全て無限個の微小な点の単純和として構成されている」と言う哲学を暗黙の前提にして成り立っている。如何にも還元主義の西洋哲学、特に何でも理屈にしてしまうプロテスタント・キリスト教の匂いがする。微小な点は何もないのだから、もちろん内部構造も全くなくて、ちょっと例えようがないのだが、この際は強引に視覚化して、規格の決まったレンガに例えよう。もちろんこの場合、レンガはこれ以上分解できない。

## 瞑想録(その9)



上の図ではレンガは、壁の強度を保つために交互に積んであるが、これを順にひたすら真上に積んでいったものが、現状の数学の集合であり数字であり四則演算であり面積や体積なのだ。一言で言えば縦横がそろっているから、四則演算も幾何学も何でもあると言う順序だ。現に単純和が平面と言う連続体になっている。これはこれで何の矛盾もない。単に私個人が「神秘性の無いつまらないモデルだ」と思っているだけだ。

これに対してアナログ集合とは、城の石垣の乱れ積みのようなものだ。



石垣はその堅牢さの観点からは大石のみで積みたいが、そうすると隙間ができてしまう。そうかと言ってせっかくの大石を四角に成型してしまうのは手間がかかる割に石垣の強度に貢献しない。だから大石の隙間に小石を詰めて全体を石垣に成形する。ここで言葉の意味の世界に例えれば、基本語彙が大きい石であり、隙間の小石は補助語彙に当たる。言葉の世界はアナログ集合の典型例だから、特にレンガとの比較でアナログ集合の特徴が掴めると思う。加えてこの「大石小石」関係は風船のように押し合いつつあるダイナミックであって、もし1つが消えたなら従来小さかった物が代わりに膨らんで大きくなるようなものなのだ。

## 瞑想録(その9)



さてここで注目して欲しいのだが、レンガは平面しか積めない。平面の限定により演算を導入できるのだが、抱き合わせで「平面しか作れない」と言う縛り、つまり限界にもなっているのだ。これが現代の数学、物理、そして経済の根本と病理である。他方乱れ積みの方は、どんな曲面でも、いや曲面以前に距離すらないふにやふにやな、厚みも有ったり無かったりするような掴みどころのない実態すら形成出来てしまう。そしてこのつかみどころのない実態、これこそが脳のモデルであり、思考と理解のモデルであり、より分かりやすく言えば意味空間のモデルなのである。脳科学にこのモデルは必須だ。

だからこの例からも分かるように、今の科学の壁を破ろうとすれば、一時の不便を承知でアナログ集合の世界に慣れ親しむべきである。ここで不便と言ったのは、アナログ集合に対応するアナログ数字やアナログ演算がまだ見つかって点だ。あるいは将来に、平面の極限では現状のデジタル数字と四則演算に収束するような、より一般的な数字と演算が見つかるかもしれないが、今は見つかっていない。最も困難な点は、集合と数字の間に概念的に大きな「開き」があることだ。

デジタル数字で既にそうだろう。バラバラの点を全順序に整列させ、1つ1つに名前をつけて始めて整数、それを何度も拡張してやっとな実数と言う連続体のまがい物になる。更にそれに演算を導入すると言う、手間のかかる手順だ。現に集合論の定理は解析学と異なってほとんど定理がなく、極めて一般的なことしか言えていない。アナログ数字で今からでも分かることは、それが少なくとも全順序ではないということだ。その代わりに遥かなメリットがあって、次元の愚かな束縛から解放される。

平面に限定されることによって誕生できたデジタル数字は、統計解析等が使えて定量的になって便利ではある。だがそれが如何に「曲がっている現実」に対してかけ離れ

## 瞑想録(その9)

ているかは、「数字が全て」の株取引の世界にその典型が見て取れる。株取引の目的は儲けること、つまり数字を増やすこと、ただこれのみだ。増えれば手段は何でも善で、減ればどんなに努力しようとも悪である。

そして株の世界がゼロサムでないことは知っている。だが基本的態度は「隙のあるバカから抜け駆けで点数をかすめ取ること」である。この意味でその精神は限りなくゼロサム、つまりどさくさまぎれの火事場泥棒に近くて、そこには武士道とか、「与えよ、そうすれば増える」と言った高い宗教性は皆無である。虚しいことだ。人の高貴な面である武士道を知りたければ、必然的にアナログ集合の世界に至らざるを得ず、武士道をより広く広めようとするれば、そこにアナログ数字の確立が希求される。それまでは「現在の理数教育にも偏りがあって最善ではない」と言わざるを得ない。

さて、私は今までアナログ集合とこれに作用する蓋然論理の重要性を強調してきた。これは即ち意味そのものに正面から取り組むことで、その取り組みは必然的に法則の無い白兵戦になってしまう。先の大東亜戦争での日本の敗北は、そもそも日中戦争を適度で切り上げなかった所で既に確定していたが、これは即ち広大な中国大陆で白兵戦をやると言うことの膨大な消耗に気付いていなかったからだ。この意味で蓋然論理は重要だが、正面から立ち向かうと手ごわい。

そして今日新たに提示したいのだが、集合と数字が、従って論理と数字や演算が離れていると言うことは、仮に意味論を通して蓋然論理の姿が見えて来たとしても、それが直ちにアナログ数字やアナログ演算の発見に役立たないことになる。これらはむしろ別物として扱った方が良く。その代わりもしアナログ数字は見つかりさえすれば、おそらくデジタル数字と同じく立式と言う一般化にまで至れて、その式はデジタル数字の卑しさの根源であった「ゼロサム」を打ち破ることができるであろう。

但しそこでの作用の仕方は、「どんな数字の組み合わせでも演算結果がある」と言った「出来過ぎた」ものではなく、特に「意味単位がことさらに取り上げる程に大きなまともりであって始めて陽に言語化される」という観点から、つまり大石には注目しても小石に変に捕らわれないという観点から、「もし演算が成り立つ組み合わせであるならば式が適用できる」と言った緩い、言わば「エージェント」(作用素)のようなものになると予想される。

## 2、究極の目標と生きがい



## 瞑想録(その9)

これまで色々なテーマで瞑想とその結果を記事にしてきました。ここで一旦振り返ります。問題意識の発端は、「大きさの無い点でも無限個集まると連続体になる」と言う単純思考の、欧米系哲学で現在世界標準になっている物の見方が、「今までの自分の体験や心情と余りにも違っている」と言う違和感でした。この素朴な疑問は若いころ、つまり学生のころからぼんやりと有りました。それが学業や会社の仕事に身が入らない原因の一つだったのですが、当時はその違和感が余りにも漠然としすぎていて、イラつきは有ったもののそれ以上の打つ手が見つかりませんでした。

そしてその違和感がなんとか言葉に出来たのが10年ほど前です。そのころはもう、おじさんと言われる年になっていました。まあそれでもキーワードが「連続体の神秘」と閃いた時に、それまでに主として数理科学や宗教学そして神秘学の本を好んで読んでいた謎が解けたように思いました。無意識かつ本能的に、これらの分野を選んでいた訳です。そして特に数理科学の本はどの教科書も、この連続体の神秘の一手前で必ず話がそれて行くことに気付きました。おそらく、「科学が入ってはいけない領域」だったからでしょう。

10年前にキーワードが結晶化して、その後の前半の5年間は、ひたすら連続体の神秘について、もちろん社畜の合間を見つけてですが、瞑想していました。そして、「アナログ」がキーワードだと分かり、アナログ数字とかアナログ集合とかを瞑想していました。その内にこれらの集合は従来の確定論理を要求しないことが分かってきて、蓋然論理と言うキーワードが出てきました。ちなみにこれらのキーワード導出のヒントになったのは、教科書とか授業では全く無くて、むしろ逆に市井の活動、俳句とかウォーキングとかフェスタ巡りとか陶芸教室とか寺社巡り等でした。ただしこれらの活動にも、ヒントのありようは濃いものではなかったもので、その効率は宿命的に悪かったです。

続いて後半5年になると、そう言った瞑想が類推や自然な発展に依って、「単に数理科学に留まらずに世の中のあらゆる事象に応用可能である」ことに気が付いてきました。ここで「あらゆる」とは、仮に学問に限っても文理双方、理系に限っても理工双方、更には学問にはならない言い伝えとかことわざとか、芸術とか文学とか、こう言ったあらゆる智的対象を含みます。そしてこれらの、従来から素朴に興味を持っていたあらゆる分野に、実はそれらに興味を持った本来的な理由があったのだと言うことに気付いてきました。しかもそれらが互いに融合し合って、より深く広範な新たな気づきに至ることが分かってきました。

## 瞑想録(その9)

興味のあるあらゆるものが立体的に相互作用し、化学反応し合って新たな気付きを呼ぶと言う好循環を始めてくれました。ちなみにアナログ集合の重要な性質の一つに相互作用、つまり物事は決して構成要素の単純和ではないと言う性質があります。瞑想もこのころになってくると、自分のキーワードがより広く、「素朴な疑問」と「意外な気付き」であると言う認識に至りました。そしてその対象は広く、「人とは何か、自分は、そして宇宙は」であると気付きました。

これらのキーワードに至れた時に、「自分が自然に興味を持った物はどんな分野であれきつといつか役に立つ」と言う確信に至りました。ちなみに、私は自分の興味範囲が広い方だとは思っていますが、決して世の中の事物の全部ではありません。代表的なのがスポーツと賭け事です。これらについては何も知りませんし知る気も有りません。これらの分野も含んだ瞑想は、そう言う分野が得意な人に任せたいと思います。

こうやって来て私が最近至った気付きは、「自分は従来にない新しいライフスタイルとライフワークを提案しようとしているのだ」と言うことです。そしてこの新ライフスタイルのキーワードは「楽しい」です。楽しいは主観なので人によって違います。従って私の提案するライフスタイルが万人受けするとは思っていませんが、参考にしたいと言う人が少しでも居れば、提案した価値があると思っています。

さて、キーワードがここまで広くなりますと、次に問題になるのが物事の優先順位です。一人の時間と能力には限りがありますから、興味の赴くままに食い散らかしているとまとまらずに終わってしまう恐れがあります。ありふれた言葉で言うと「選択と集中」が必要な局面にきた訳ですが、その具体的な態様についてはまだ模索しているところです。

もう一つ最近新たに出てきた問題が、瞑想は疲れると言うことです。もちろん瞑想は私のライフワークであり、やっていて幸せなのですが、世の中には遊びでさえ「面白かったけど疲れた」と言うことがあるでしょう。人を癒すとか未来を予言するのにもエネルギーが要るように、瞑想と言う無から有を作りだす行為にも結構なエネルギーが要って、まあ1日8時間が限度ですね。残りの内8時間は睡眠するとして、さらに残りの8時間、そのうち4時間は食事や風呂として、本当の残りの4時間は無目的に息抜きをするのが長続きの秘訣だと分かってきました。頭の切り替えとリフレッシュです。ですから残りの4時間は息抜きと言う状態で無目的にやるのが良いと思っています。しかもそう言う無目的が、意外なところで本業に結びついたりします。

## 瞑想録(その9)

ここ最近ちょっとはまっている事を挙げると、美術館・博物館巡り、プチグルメと料理作り、あと自分史の解明つまり今までの人生の折々で感じたことのその理由の深掘りです。この最後の「深掘り」が、私のライフワークの肥やしですね。これをやって始めて、「私の人生は価値があった」と言える訳です。まあ他にもテレビでちょっと見たことなどをきっかけに瞑想のネタを見つけることも有って、これは先の「息抜きが生きてくる」例なのでしょう。

私は性格的に、細かい仕事(中島誠之助さんの言う「良い仕事」)や地味な努力は向いていないので、もう出来上がった何らかの分野の専門家になる気は全くありません。その程度が人生の目標なら、とっくにそう言う世俗の知恵で小金持ちをやっています。最近自分の性向がかなり分かって来ましたが、それは基本的に、「統一理論を好みながらも他方で雑学的な多様さにもあこがれる」と言う、ある意味矛盾した性向です。これを両立させる道は、「広く知ってその中に意外な関係を発見すると言うことだ」と理解しています。

しかもこれらの事業を、資金をかけずにやりたいと思っています。それは自分が貧乏だと言うことよりも、「人は多少の制限があった方がそれに対する工夫を通してより多くのあるいは深い気付きに至れるのだ」と言う蓋然的な法則を、経験を通して信じるに至ったからです。

### 3、一神教の始まり

一神教は今もひたすら増殖中で、もはや世界の人口の半分に迫っているが、私のようなアニミズムの者にとっては、なぜ一神教がかくも増殖しつつあるのか、それ以前にどうして一神教が成立してしまったかが、素朴に不思議である。増殖の理由はしつこい伝道と、理屈で納得できて神秘体験が不要と言う入口の広さであろうが、本日はその成立について瞑想してみる。

一神教と言うと、ユダヤ教、キリスト教、そしてイスラム教であるが、後の2つはユダヤ教を基礎に一神制を継承した物であるから、成立の瞬間を見るならば、それはユダヤ教の始まりと言うことだろう。聖書(キリスト教の旧約聖書)の創世記によると、ユダヤ教の始まりは、形の上では人類の始まりであるアダムとエバに遡るものの、それが現世の一神教としての顕著な性格を持つようになったのは、族長時代のアブラハム(アブラム)からである。この間に、単純計算で2千年が経っている。

## 瞑想録(その9)

アブラハムは当初、父のテラとカルデアのウルに住んでいた。ウルはメソポタミアの北西部に当たり、メソポタミア文明は多神教であったことから、このころの彼らも多神教徒であったことだろう。その内に彼らは「神に命じられて」、一族とともに西方への移動を開始する。この時テラ達に呼びかけた神が誰であったかは明らかでない。おそらくユダヤ教のヤハウエでないであろう。また、啓示に従って迷わず未開の地を目指してしまう辺りに、信心深さと言えは聞こえが良いが、五感よりも理念や理屈を偏重する特異な性格が見える。

テラは途中で寿命が尽きるが、アブラハムにはこの後に更に神から啓示を受け、「カナン(パレスチナ)に行け」と指示され、条件をのんで言われたとおりに実行する。ここに既に契約思想の原形が見える。そしてこの時に素朴な意味でのユダヤ教、一神教が始まったと考えられる。ユダヤの神ヤハウエが自らを名乗ってかつ唯一神であると宣言して現れたのは、この時が最初である。ただヤハウエと言う名前が、ヘブライ語の be 動詞に当たるHYHの格変化形に過ぎない、つまり人工的で歴史を感じない名前の神であるために、この神はメソポタミアの何らかの神が唯一的に際立った物なのか、あるいは唐突に表れたのかは不明である。ちなみにYHVHと言う変化形は未完了体であるために、「これからずっとお前の神であり続ける」と言うニュアンスは出ている。

アブラハムが移住した時のパレスチナ、時代的には紀元前21世紀であるが、このころのパレスチナは、北のヒッタイト、南のエジプト、東のメソポタミアのいずれからも離れた未開で辺境の、しかも不毛の地であり、いくら神の命令とは言えこのような地へ何も疑わないで移住することは、いささか非常識で余りにも理念に従順すぎる。その意味で一神教の発生は、アブラハムの個人的な性格も大きく作用していると言える。このころパレスチナには既に未開の先住民が多少は生きていて、その遺跡からアニミズム的傾向は見えるものの、アブラハムとの血縁的及び思想的な繋がりはないから、彼らをして「ユダヤ教も始めは多神教だった」と言うことはできない。なおアブラハムの一神教的偏屈さはイサクの燔祭行為にも見て取れる。

アブラハムはユダヤ教の祖であるとともにユダヤ人の祖でもあるから、「ユダヤ人は全員一神教徒」と言うべきであろう。そしてユダヤ教の一神教としての発展には3つのエポックがあるとされる。第1がアブラハム(イブラヒム)への啓示、第2がモーゼ(モシエ、ムーサ)によるシナイ山での十戒の受領で紀元前14世紀ごろ、そして第3がバビロン捕囚時における聖書の書留と編纂で紀元前6世紀ころある。十戒には「他の神を拝んではならない」と一神教が明示されており、また編纂前の聖典は口伝であった。



## 瞑想録(その9)

①聖典の内容の内アブラハム以前の、アダムとイブからノアの洪水神話やバベルの塔の破壊あたりまでは、メソポタミア一帯の神話と共通点が多く、ユダヤ教としての個性が出てくるのはアブラハム以降であること、②及びこのアブラハム以前の部分については、多神教的要素は見えないものの一神教的要素も特に顕著でないことに注目すべきである。またフロイトは、モーセ時代のエジプトの王朝が、多神教のアーメン信仰から一時的に太陽神アテンのみを拝む一神教に転換したことを根拠に、アテンからモーセへの影響を指摘しているが、アテン神はそうは言っても太陽神と言う自然神であり、私はこの説は取りがたい。

さて、先にユダヤの神ヤハウェ自らが啓示神として語りかけたのはアブラハムに対しての語りかけが最初だと記したが、聖書にヤハウェと言う単語が出てくるのはアブラハムの時が最初ではなく、むしろ創世記の冒頭の宇宙創世のときから、ヤハウェなる名詞は聖書で使われている。だがこれを以て「アブラハム以前から一神教は有った」と言うことではない。聖書の記述には重複部分が多く、書き留められる大元に神をヤハウェで呼ぶ「J資料」、エロヒムで呼ぶ「E資料」等、合計4つの口伝の流れがあって、これらが聖書編纂時に融合せずに合体されたとする説が定説になっている。つまりJ資料の流れでは、口伝の間に編纂の前までに、神の名が遡ってヤハウェに統一されたと見るのが妥当である。こう考えるとヤハウェと言う名に歴史を感じない理由も見えてくる。ちなみにアブラムも単に「高い父」と言う意味であり、おそらく死後追贈された名前であって、メソポタミアではもっと別の名前であったことだろう。聖書編纂者は神等の名の改変により、多神教のメソポタミアとの連関を絶ち切ったつもりなのだ。なお、エロヒムと言うヘブライ語は「神たち」と言う複数形であり、これをバビロニア時代の多神教の名残と見ることもできる。つまりうっかり消し忘れたと言う訳だ。

結局ユダヤ人とは辺境の弱小民族であり、住む自然環境は厳しく、政治的にも絶えず征服されたり捕囚されたりと言った連戦連敗の弱小民族で、いつも困難な目にあっているために、悠長にアニミズムをやっている余裕などなく、民族統一のためのいわば非常手段として、一神教と言う理念先行型の、契約の有無で是非が判断されると言う分かりやすい形としての一神教が、アブラハムの突然変異以来強固に発展して行ったということだ。

ではなぜこの悲惨な民の弱小ゆえの一神教が、今や世界宗教になってしまったのか。ちなみにユダヤ教は依然としてユダヤ人の民族宗教である。ユダヤ教からローカルな民族性を取りはらったのが、キリスト教の始祖である使徒パウロで、彼は「合理的に」、割礼等の民族的要素を捨て去って契約と言う汎用的要素のみ残す形でユダヤ教を大幅変換した。そのために、これはパウロの手柄ではなくて単なる結果論である

が、世界宗教としての一神教が成立した。そして「契約さえすれば誰でもなれる」と言う安易さゆえに、世界に広まっていったと考えられる。

### 4、顔認証技術

ログインのためあるいはより広くセキュリティのための顔認証技術が最近かなり発達して、ほぼ実用の域まで来ている。その技術はメーカーに依って多少異なるようだが、基本的には顔の特徴部分数十項目の数値化とその統計解析に依る特徴抽出、並びに事前に用意したテンプレートとの比較による当てはめ照合技術の組み合わせであると言われている。前者は基本的にデジタル、そして後者は半アナログ技術である。

顔認証技術の元になったのは、手書き文字識別技術である。もう10年近くも前に、電子辞書には手書き漢字の識別ソフトが、標準機能として装着されていた。そしてそのソフトの技術の要諦は、類似な漢字を如何に弁別するかにあった。例えば何と伺、車と東、柏と栢、千と干、あるいは気違いと気遣いのように、たまたま互いに良く似ている漢字の組み合わせがいくつかあり、これらを区別できれば必要十分な訳だ。

だから、漢字識別ソフトは大ざっぱに言うと、①基本的な万能識別機能と、②特に似ている漢字の組をことさらに分ける特殊機能の、2つの機能の組み合わせで出来ている。そして顔識別ソフトも、文字より顔の方がはるかに複雑で、また弁別すべき個体数もはるかに多いために、ソフト全体はより複雑になり、特に②に当たる小技はより必要なものの、基本的なコンセプトと構成は同様である。

そして顔認証の場合はさらに、上記のコアな識別技術に加えて、AI(人工知能)による学習機能が付け加わっている。これは先ず認証システムに模範サンプルを見せ、次いでシステムの判定とその判定結果の正誤を外から与えることにより、言わば試行錯誤的に精度を高めて行くと言う、一種の学習技術である。但し問題設定や正誤は外から人が与えるので、ホーキング先生の言うような、「AIが人を支配する」と言うことは起こらない。

さてここで、顔認証技術に関連して、2つのテーマを提示したい。その第1は同様の技術が筆跡鑑定に応用できないかと言う問題である。筆跡鑑定は裁判等に於いて重要な証拠ではあるのだが、その類似・非類似は専門家の勘と経験によるしか無く、またその鑑定結果の表現も「かなり類似である」と言った定性的表現に留まってしまうために、裁判等における証拠能力は不当に低いのが現実である。そのために、筆跡鑑定ソフトが顔認証ほどに実用化されているかと言うと、そう言う話は聞こえてこない。

## 瞑想録(その9)

応用に向けての一番の問題点は、筆跡は顔に比べて、代表的指標を見つけにくいことである。顔の場合は、眼と眼の間とか、鼻の下の長さとか、明らかに代表となりそうな部分が、素人でもすぐに十数個は挙げることができる。そしてこれらの指標は、指標としては万人共通である。こう言った誰でも挙げられる指標以上の指標群を巧妙に見出したところが、顔認証技術精密化のポイントであるのだが、いずれにしろ基本指標の存在は全ての始まりである。

ところが筆跡はもつととらえどころが無くて、とりあえず主要指標として何を拾えば良いのかが、なかなか見えてこない。テンプレートも見つからない。筆の勢いとか、跳ねる・止めるとか、筆圧とか、言葉では言えても掴みどころがない。要するにとらえどころが無さ過ぎるのだ。超アナログと言っても良い。こう言う対象はおそらく、いくらビッグデータ解析技術が進歩しても限界がある、つまり今はさも万能に見えるビッグデータ技術の、将来の不可能点となるであろう。

第2のテーマは、この顔認証技術がどんどん進歩して行けば、現状は専門家による超アナログ判定に依っている観相学に、とって代わることができるかという問題である。観相学は手相学と同様に、顔の特徴からその人の性格や未来を予言する技である。特に先に述べたAIの学習機能による「自律」成長に期待すれば、一見将来的には可能であるかに見える。現にまだお遊びの段階だが、コンピューター顔占いとかコンピューター手相見とかのソフトや「占い機」は、ゲームセンターとかに出回っている。

ただここでも現実化には基本的な問題があって、ソフトが腕の良い観相師にとって代わる程になれるかは疑問である。基本的な問題の第1は、AIと言っても全くのデジタルであるから、アナログな技に対しては高々近似でしかない、つまりできたとしてもその意味をコンピューターは全く理解していないという点である。ただこれは、AIの近似度が使える程に十分に高くなれば、その結果を人が読むと言うことで良いではないかと言われれば、その通りである。

基本問題の2番目は、先にも述べたように顔認証の技術の方向はあくまでも差別化であって特徴抽出ではないということだ。漢字認識でもたまたま類似の漢字の無い部分は、仮にその部分が極めて特徴的であったとしても、そこを細かく観察し弁別する機能や技術は不要である。あたかもこのように、顔認証と観相学は技術的には一見似ていながら、その目標はかなり違うのであり、少なくとも顔認証技術の単純な延長上にデジタル観相学があるとは思えない。

本日議論した種々の認証技術の動向から得られる教訓は、次のようである。デジタルソフトは将来には、あたかも今のデジタル音源のように人の感性をだます程に近似度を上げることはできるだろうが、その用い方が単なる識別ならそこで十分であろうものの、その意味の解釈が必要になると言う時点になると、それはあくまでも人の感性と言うアナログ能力でしかできないということだ。

最後にホーキング先生の「AIが人を支配する」と言う警告について一言触れておきたい。第1にその心配はデジタルがアナログにとって代わることができない以上は、意味が介在できないので杞憂である。そして第2に、そんなことを心配するよりも、「遺伝子技術によって現人を越える新人が近い将来に製造されてしまうのではないか」と言う心配の方が、よっぽど現実的な心配だと思われる。

### 5、データの鮭化

最近のデータメモリーの大容量化には目を見張るものがあり、従来はとても集積できなかった大規模データ、いわゆるビッグデータがワンチップで集積できるようになった。しかもこのビッグデータ列が、その集積にことさらに労力を用いなくても、ユーザーによるネットへのアクセス行為とか、スイカのようなタッチカードに依るタッチと言った、従来から客になるために行っていた最低限の行為を行為者が成すだけで、言わば努力なしでデータが自ら遡ってくる。

一昔前までのデータ解析は、解析そのものよりもデータを足で集める作業の方が、地道でかつ手間のかかる作業だった。アンケート調査のようにことさらに集約マンを雇って、家庭訪問をして回答をもらい謝礼を払っていた。今はこのような仕事は全く不要で、ほぼ自動的にデータの方が集積してくる。しかもそれらは一昔までは垂れ流しで捨てていたデータなのだ。つまりデータを拾う方から見れば、データがあたかも鮭のようにあるいはカモネギのように、自らやってくるようになった訳だ。私はこれを「データの鮭化」と呼んでいる。

ところでビッグデータ解析の観点からは、データの種類や質に依って、解析のしやすさや深掘りできる程度が異なってくる。具体的には、①行列型(定型)の数値データ、②非定型の数値データ、③関係が明確な非数値データ、④単純繰り返しの多い非定型文字データ、⑤繰り返しが明確でない文字または非文字データの順になる。①の例としては工業プラントの同期プロセスデータ、②の例としては非同期プロセスデータやDNA情報、③の例としてはスイカの乗降情報やヤクレカの使用履歴、④の例とし



## 瞑想録(その9)

てはツイッターのつぶやきデータ、そして⑤の例としてはウィキペディアや画像データ等が考えられる。

一番解析しやすい行列型数値データの場合は、単純ヒストグラムのほかに種々の統計解析や多変量解析と言った定量的な解析が適用できて、データに関してかなりの深掘りができる。ただそれらの技術は従来から、少なくともスモールデータではやられていたような技術ばかりで、新たな解析手法の開拓の契機にはなりにくいように見える。つまりその分野の専門家にとってみれば、単なる看板の架け替えでもう何年か飯が食える訳だ。

他方一番関係や特徴が見出しにくいウィキペディアのような、説明的あるいは図表的データの場合だが、仮にテキスト分析やデータマイニング、あるいはパターン分析から、さらにAIの学習機能を使っても、ことさらな特徴が見いだせないと言うことはありえる。でもその場合でも、最終的には検索者のアクセス履歴やURLのジャンプ履歴等を用いることにより、その回数や順序列を数字とした半定量解析と言う方法が残っている。これは要するに、人文系の諸分野でアンケートを作って入札してもらい、そのヒストグラムで傾向を掴むのと同じ、安直な数量化です。

このアンケート方式と言う「最後の手段」があるので、その意味では「全く解析不能なビッグデータ」と言うのはないことになる。もちろん解析の深さや信頼度は異なるが。一番厄介なのが、言語あるいは言語が混じった不規則なデータ列の解析だ。まだ手つかずと言うか隔靴搔痒の面が多く、困難は伴うが、発想の全く新たな解析手続きが見出される余地はある。コツは、変に厳密を争わないことだ。それと随所に専門家の判断と決断が入るインタラクティブな解析法になると思われる。

ビッグデータ解析は全体的に、万能な手続きに依って情報を漏らさず取ると言うよりは、情報の構造に合わせてその特徴部分をえぐり出す、あぶり出すと言う、ケースバイケースの形になるだろう。一般的にこういう性質の分野における工夫は、多分にケーススタディーで統一理論が出にくく、かつ仮に出ても抽象的すぎて使い物にならないと予測する。またビッグデータ解析と言っても所詮は何らかの統計で、大きい物を見出す技術だから、「特徴的だけれども微小だ」と言った種類の特徴は拾えない。この面での工夫は検出限界との戦いになるだろう。

更に、「鮭のように楽に手に入るデータと言う情報抽出方法が、解析しようとする総体の本質を本当に突いているとは限らない」と言う問題も有ります。以前に数値主義への批判として、「数値化可能性と情報代表性は全く異質であるので、数値に頼りすぎ

## 瞑想録(その9)

ると本質的でないところで変に厳密をやっていることになる」と指摘して、数値に頼りすぎる悪弊に警鐘を鳴らしましたが、ここでも本質的に同じ問題がある訳だ。

更にデータの種類の種類に上記の複数のカテゴリーが混じっている場合は、基本的には一番性質の悪いデータレベルに準拠することになってしまう。例えば数値データと言語データの混合である場合には、①数値も言語の一種としてレベルを落として扱って情報を落として統合するか、②あるいは数値部分は数値解析し言語部分は言語解析した上でそれぞれの解析結果を教訓レベルで人の知恵で統一化させることになります。言語と数字の間にはその自由度と加工可能性に、大きな溝がある。

さて、こうしてここ数年の間に急速に安価になったデータと言う無体物と言うか情報に対して、有体物、例えば食糧とか人体とか家とか家具とか衣料等は、有体物故にこのような鮭化のような便利な省力化手段がまだありません。おそらく量子トランスポーションのようなSFまがいの技術が実用化されない限り無理だろう。しかもこう言うブツは、人体が典型ですが、人の存在に必須であるために、無くしてしまうことができない。せいぜいレトルトとかプレハブとかで、長持ちさせるとか多少の省力化ができるだけだ。この意味で、駅の改札は無人に出来ても、あるいは将来的に駅が存在は無くしても、コンビニやスーパーやファミレスやデリバリーは、仮のそれが恐ろしく非人間的な単純作業だとしても、無くすことができない。これは一種の矛盾だ。

ここで我々の近未来に、二極化された職業体系を見えてくる。①解析法を考えその応用方法を考案する頭脳集団と、②ひたすら単純な肉体労働を繰り返すほとんど頭を使わない集団だ。この趨勢はある意味当然である。その理由は、例えば経理会計とか営業とか工程管理と言ったいわゆる「中間的仕事」を、IT技術がほとんど持って行ってしまったからだ。つまり今後中間的能力の人は嫌でも肉体労働をあてがわれる。また頭を使う側もその成果はデータが各論的である以上雑多であって、アインシュタインのような天才的な才能は不要です。アインシュタインが今生まれていたら一体どんな職に就いたのでしょうか。カルブレスCEOのような犯罪人でしょうか、あるいは天才ハッカー(クラッカー)だろうか。

良くも悪くもデータが鮭化する時代にあって、我々は大きな意識改革を迫られている。その勢いは凄まじく、ほとんどの人が意識改革できる前に押し流されてしまう程だ。

## 6、おイヌ様

## 瞑想録(その9)

先日ある駅前を通りかかると、数人のご婦人が立ち並んで、立て看板を前に置いてチラシを配っていた。近づきながらふと看板を見ると、「イヌに見習いなさい！」と書いてある。「犬に見習う？」。文法的に間違いはないし意味も通るのだが、それにしても人様が犬に見習うってどういうことだ。ひょっとしてソフトバンクの宣伝に悪乗りした受け狙いか？それとも、「犬のように忠実であれ」と言う真面目な呼びかけだろうか。まるで綱吉の時代ではないか。

などと首をかしげつつ隣の看板を見ると今度は、「ネコと和解せよ！」などと書いてある。はあ、猫と和解ねえ。まあ確かに昔、猫を車ではねそうになったとか、あるいはさんまを狙った猫を追ひ散らしたようなことはあったが、人様がネコと和解ですか……。もしかして動物愛護団体とかどこかの動物園の宣伝なのだろうか。今度は「お猫さま」でも流行り出したのだろうか。

不思議に思いつつ近づくと、どうもこの団体、異端のキリスト教であるエホバ(ものの塔)の連中らしい。そこで私は納得した。ああ、エホバの奴らね、あいつらは頭があつちに逝っちゃっているから、この位変わったことは言いそうだな。それでも異端とは言え腐ってもキリスト教だろう、「人様が偉い」が原則じゃなかったのかな。「人は神から全てを支配する権能を与えられた」、そう聖書には書いてある。異端になるとここまで変になるのかよ。

そう思いつつ彼らに最接近して、やっと謎が解けたね。「イヌに見習いなさい」は、私が近眼のために遠目にそう見えただけで、実は「イエスに見習いなさい」だったのだ。遠くから見たので「エ」を見落とした上に、「ス」が「ヌ」に見えたと言う訳だ。なるほど、それだったらごく普通の聖書解釈だ。とするとさっきの納得は何だったのだ。

そう思いつつ隣の看板を見ると、実は「神と和解せよ」だった。神の字が「ネ申」と見えた上で、申の「コ」の部分だけ太かったので、私には「ネコ」と読めてしまったのだ。「神と和解」、これなら素直に分かる。今の人は神に反逆して墮落した姿だと言うのが、キリスト教の解釈なのだ。だから人には罪があり、悪がはびこるという理屈だ。

それにしてもエホバだと言う根拠だけで、「イヌに見習え」とか「ネコと和解しろ」がそれなりに納得できてしまう、この心理過程は一体どうなっているのだろう。これがもし正統派のキリスト教、例えばルーテル派がこう言うことを言っていたら、私はどう思っただろうか。まああの地味なルーテル派が街頭に看板を立てて立つとは思えないが。やっぱり「本当にルーテル派か」と、煽り文句よりもその集団の正統性の方を疑いこそすれ、文語に納得はしないのではないか。

## 瞑想録(その9)

更にもし、看板の主が仏教や神道の人々だったら、私はこれらの呼びかけをどう捉えただろう。仏教や神道には「人は特別」と言う概念はない。仏教には輪廻があり、神道では全てに靈魂が宿っているが、それでも「イヌネコをかわいがろう」位は言っても、「イヌに見習いなさい」とか「ネコと和解せよ」、これらはちょっとありそうもない。やはり納得しないように思う。

では看板の主がイスラム伝道団だったらどう思っただろうか。私はイスラムが一神教であることを知っていて多少の知識はあるので、やはり「ちょっとなあ」と思うのだろう。だが一般の人々のイスラム教に関する知識は、「千夜一夜」とか「イスラム国」程度だから、「やっぱり変な人々ね」位かもしれない。あるいは「あの人たちは変だから近づくのは辞めよう」位か。いずれにしろ「宣伝主体が変だ」と言う合理化の元に、意味としては通じて居たことだろう。

この一連の心理プロセスで分かることは、①人は置かれた状況に応じて何とか理解しようと努力する、②理解はできたが不合理な場合は構成要素のどこか一番不案内な部分を犯人に仕立てて合理化を図る、③合理化できたところで危険回避のために本能に従って安全避難行動を取る、と言う順序だ。

ここでのプロセスのポイントは「合理化」である。人の本能は自己保存と危機回避にあるところ、理解不能の場合は直ちに「危険フラグ」が立つ。そして理解不能のままだと不安が解消せず対策も打てないので、心の中の試行錯誤により理解できる方法を編み出し、危険の位置を特定した上で、その危険に対して回避行動を取ると言うことだ。但しその理解はあくまでも蓋然的であって、しばしば間違っているが、それでもトータル的に、理解不能よりは遥かに安全なのだ。

こう言う心理過程つまり自己保全過程は、本能と種の保存が究極である以上は、人以上に犬や猫もやっているのだ。ただ言葉になっていないだけで、犬はワンワン威嚇するし、猫は様子をうかがった後で餌に飛び付く。強いて言えば人は知能が優れている分だけ、「与えればやがて増える」と言った、経時を要して因果関係の成立に時がかかるとか何段階もの推定を挟む場合も、理解できるよう能力を持っていると言うことなのだ。

ここで合理化とは、脳の論理機能と言う極めて上位の機能であり、他方「何か変だ」「良く分からない」「危険かもしれない」等は心象レベルのそれも「感じる」と言う、かなり下位と言うか本能に近いプリミティブなレベルで生起する。これほど離れた心と頭の



## 瞑想録(その9)

レベルがダイナミックに情報を交換し合う、だからこそ人や犬は生き延びられて現在まで絶滅しないで生き延びたのだが、思うにかなりダイナミックな構造である。

### 7、忠臣蔵考(その3)

最近まで、役所広司が主演で半藤一利原作の映画、「日本の一番長い日」が上映されていた。先の大戦の終結の是非を巡った攻防である、「宮城(きゅうじょう)事件」をテーマとしたものだ。実は半世紀近く前にも同じテーマの映画が作られており、こちらは大宅壮一原作で主演は三船敏郎だった。

宮城事件とは、明日日本が無条件降伏すると知った近衛師団の青年将校達が激昂して立ちあがり、当時の陸軍師団長を暗殺してニセの命令書を作って師団を蜂起させ、放送される予定であった玉音放送の、「終戦の詔(みことのり)」のレコード原盤を奪取しようとした事件である。三島由紀夫のように檄を飛ばすのではなく、あくまでも命令書に頼ろうとした将校らの選択は、軍の動かし方としては正しかった。

で、この事件の結末だが、決起将校たちは次の日が明けても結局レコード原盤を見つけることができず、焦りの中で詔は放送されて終戦となり、首謀者たちはいずれも自決した。もし原盤が奪取されてこの蜂起が成功していたら、一時的には国民に大和魂の高揚はあったかもしれないが、戦争終結は遅れてより多くの戦死者を出し、最悪の場合日本は連合国に依って分割統治されていたかもしれない。

さて、このように宮城事件を紹介した本日の目的は、忠臣蔵を通じて日本人の美意識を探る作業の一環である。以前に「忠臣蔵考(その1)」で、忠臣蔵のもしもについて、いくつかの素朴な疑問を提示した。そしてその中に、「もし赤穂の武士団が吉良の首級を挙げられなかったら、その後のこの事件に対する評価はどうなったであろうか」と言う問いがあった。この問いについて本日は、今触れた宮城事件と対比して瞑想してみたい。

赤穂の一団が見事に吉良を見出せたのには、多分に運があった。見出せた時には夜が開けてタイムリミット寸前だったし、吉良側の侍たちとの切り合いでの被害が少なかったのも幸運だった。そもそもこの日に吉良が外出していなかったのも、その点を調査の上での打ち入りだったとは言え、不安材料だっただろう。他方の宮城事件で蜂起したのは宮城内部を良く知る近衛師団だったが、それでも原盤を見つけられなかった。こちらは運がなかった。

## 瞑想録(その9)

もし赤穂の一団が朝までに吉良を見出せなかったら、江戸の治安を第一とする公儀が鎮圧の兵を向けたであろう。そして無念の赤穂の一団は、もはや武運拙しとして全員切腹して果てたであろう。そして事なかれ主義の公儀の判断によりこの事件には報道管制が引かれ、事件自体が闇に葬られたに違いない。赤穂の一団が運よく本懷を遂げて、その評判と称賛が直ちに伝わり、公儀としてももはや穏便に済ませる事ができなくなったからこそ、それ以後の赤穂の武勇の現在に至るまでの称賛と伝承がありえたのである。

ではもし失敗していたら、伝聞の有無は別として、人々は赤穂の一団を単なるみじめな死と捉えたであろうか。赤穂の武士団の成功は幕府にとっては、むしろ面倒の持ち上がりではあった。だが赤穂の一団の目的は吉良を打つまでであって、その後潔く自首して出ている。そのために事件は優秀な幕閣の知恵に依って、「仇討の面を弱小化して再発を防ぐと同時に文武の面を強調して民意を引き締める」と言う、万事収まる方向に位置づけられた。そのお陰で幕府は平和ボケした元禄の時代に活を入れる方向に持って行けたし、また赤穂の一団の側にはその行為に称賛の花が添えられた形だ。

ではもし宮城事件で原盤の奪取に成功していたら、彼らの評価はどうなっていただろうか。彼らの目的は戦争遂行であったから、赤穂の一団のように本懷の後に謙虚に自ら自首して出ると言うことはなかっただろう。むしろ逆に、他の方面部隊に同調を呼び掛けて場合によっては政府転覆を主導したことだろう。これではどう言い訳しても、「自分の意地を通した」と読まれてしまう。五一五事件や二二六事件の顛末と同様に、宮城事件の蜂起は早晩鎮圧されたであろう。蜂起兵たちも捕縛の上で銃殺刑になり、この事件に依って武士道が高揚することもなかった。終戦の最終決断は何よりもまず天皇陛下直々のご聖断であったからだ。

と言うことは、日本人はそもそも結果よりも心構えを尊重する国民性ではあるものの、忠臣蔵の評価にはやはりその成功が大きく寄与していたということか。まず、隠忍自重の上に命を捨てて主君(大義)のために立ち上がったと言う行為は、それだけで十分に大和魂に響く行為である。だから仮に討ち入りに失敗しても、彼らの行為は称賛されたであろう。その上で討ち入り成功の見事さは、やはり更に人々の心を打ったのではないか。お見事の一言である。

赤穂の一団は本懷さえ遂げれば、後はそれ以上大義を喧伝する必要などなかった。最低限の行為で寸止めしたために、「謀反でなくて忠義」となって幕府も論理づけが可能であったし、その成功に対する謙虚さが一層周囲の共感と呼んだ形だ。要する

## 瞑想録(その9)

に自分のためでなく他者のためにあるいは正義のために命を捨て、そして成功したのだ。成功したからこそそこに、庶民が望む御正道あるいは信賞必罰等、その義賊のような一面を図らずも体现することができ、これが庶民の喝さいを呼んだ。結論として、成功はやはり重要な要因である。

赤穂の一団が民衆の歓迎を受けて文学になって以来、文学とはそういうものだが、実話でない多くの美談が付け加えられた。高田馬場の決闘とか南部坂の別れとか垣見五郎兵衛とか俵屋玄蕃とかだ。それ以外にも各地に多くの美談が残っていて、その様はヤマトタケルに似ている。私が歩いた中でも、戸塚宿にお軽勘平の碑があり、三島には神崎与五郎(大高源吾とも)の伝承があってこれは箱根の甘酒茶屋でジオラマになっていた。

こうして赤穂の一団の謙虚な成功は、後の大和魂の成熟に多くの影響を与えた。特に明治以降の国威発揚に於いて結晶中心的な結構な役割を果たしたように思う。このことは、なぜか戦犯指定を免れた満州国設立の立役者の石原莞爾が、先の大戦の戦後処理時に於いて、「赤穂藩が潔く城を明け渡したように、我々も今は潔く国を開けよう」と呼びかけた、その呼びかけ方にも如実に表れている。

そして宮城事件の決起には赤穂の一団の成功談も心理的遠因になっていたと思うが、残念なことに玉(ぎょく)に逆らったところで仮に成功しても汚名を着る運命となっていた。赤穂の事件の本質が正しく伝わって居ずに、単なる精神主義に陥っていたとも言える。宮城事件では残念なことに「正義」が上滑りしていた。宮城事件が、似た事象である赤穂の討ち入りの影響を受けながらそれと異なっているのは、「犯行と失敗 vs. 忠義と成功」と言う、結果評価の対極である。

総括すると、赤穂の一団が評価される理由は宮城事件に比べると、忠義、隠忍自重、成功、信賞必罰、義賊性、謙虚さ、こう言った面が独りよがりにならずに地に足が付いていたと言うことではないか。

## 8、ポスト安保

当ブログは、蓋然推論や素朴な疑問と意外な気付きを取り扱うサイトであって、特定の政治信条を掲げるサイトでない。それにも拘らず本日はいわゆる政治ネタを扱うが、それは政治が蓋然推論の典型例の一つだからである。特定の政治信条に係るコメントは遠慮して頂きたい。

## 瞑想録(その9)

先日、新安保法案が成立した。これで集団的自衛権が合法化されて、相互保障と言うかより確実な国防が可能になり、「一人前の国」あるいは「普通の国」にかなり近づいた。今はこの法案にまだ慣れていない人も多いだろうが、早晩に「今までの方が国としてかたわだった」と思える日が来るだろう。

そもそもこの法案については、「アメリカ様下請け法案」だとか、あるいは安倍首相の姿勢について「どういう日本を取り戻したいのか見えない」と言った、素朴な疑問の声は聞こえた。先ずアメリカ様について言えば、これは逆である。今まで日本が国防軍を持てなかったのも、旧進駐国のアメリカ様が首を縦に振らなかったからだ。アメリカは、日本のサムライ的国民性が敗戦を経由しても本質に変わっていないことを見抜いており、「またいつ一億総玉砕とか特攻とかを始めるか分からない」と、警戒して押さえて来た。日本に航空機やミサイルを作らせないのも同様である。

ところがこのところ世界の力の均衡が変わってきた。具体的には米国の衰退と中国の台頭である。この現状に鑑みると、アメリカはまだ日本の暴発に完全に安心した訳ではないが、この際「リバランス」と称して、アジア圏の安定の一部を日本に担ってもらう方が、総合的に得策で実効的だと考えるようになった。安倍さんはこの転換を梃子にして、日本を戦後レジームから脱却して、国防力も備わった本来の国にしようとした訳である。つまり安倍さんは利用されたのではなく、逆にアメリカを梃子にして日本を直した勝者である。

また安倍さんの取り戻したい日本、それは国防力を含むあらゆる面での国の体を有し、かつ大和魂、具体的には記紀神話に始まり本居宣長によって整備され、吉田松陰に引き継がれた日本魂を持った日本である。旧長州藩士の流れをくみ明治維新のDNAを引き継いでいる安倍さんは、日本のあるべき姿が佐久間象山の言う「和魂洋才」と言う文武両道であることを弁えている。

さて、ここで集団的自衛権について一段落した後に安倍さんが手に付けることは何であらうか。先ず、学者を含む護憲派の左翼知識人たちがしきりに主張しているように、集団的自衛権と憲法第9条は相容れない。これは正しい。だからねじれている憲法第9条の改正、これは早晩に必要である。だが今ではないだろう。賛成派も反対派も新安保法制に慣れていないからだ。賛成派はまだこの法案の使い勝手が分かっていないし、反対派も違憲訴訟などの最低限のセレモニーをやり終えていない。安倍さんはここについては、熟成のための時間を置くだらう。



## 瞑想録(その9)

では安倍さんは改憲機運が満ちるまでの間に何をするであろうか。それはおそらく、経済力安定と言う足元固めのためのアベノミクスの実現であろう。しばしば勘違いしている人が多いが、アベノミクスは独立かつ単純に国民の福祉のためだけにあるのではない。また、単に経済力と言う国力の増強のためだけでもない。アベノミクスの一番重要な目的は、集団的自衛権の実現に必要な国費をねん出することだ。

世の中は何かやろうとすると、たとえ良いことであっても金がかかる。当然のことだ。だから集団的自衛権を実現するには従来以上の国防費が必要で、それをどこからねん出しないといけない。金が出なければ、せっかく作った仏に魂が入らずに流れてしまう。つまり反対派にしてみれば、集団的自衛権に係る資金源を断つのが一番有効な潰しの手段だ。

その資金のねん出のためにアベノミクスがある。だから安倍さんは日本の経済力の向上のために今までも、教育の理科系シフトとか、法人税率の低減とか、女性進出による労働力の単純増加とか、年金開始年齢の引き上げとか、これまでも色々な手は打ってきた。だが安保法案改正の妨げになるような国民感情を逆なでするような手は、打ってこなかったし打てなかった。

今やその法案が成立したのだから、今度は本気でアベノミクスに腰を入れるだろう。つまり経済力増強のために更に施策を施すだろうが、もはや日本の経済は壮年期を迎えており、かつ施策と言っても他の国だってそれぞれ手を打つだろうから、これらの施策はせいぜい他国に劣らない程度の経済向上効果しかない。

ではどう積極的に出てくるか。具体的には先ず消費税率の引き上げだ。大前研一さんに依ると、日本経済立て直しのためには税率の20%も当たり前だそうだが、政治家としていきなりこれは出来ないので、先ずGDPが下がっても予定通り税率10%は実施する。しかしそうすると、庶民の困惑はともかく、トータルとしての税収が下がってしまう恐れがある。そこで安倍さんならどうするか。そのヒントは、安倍さんが敢えて公言していないところにある。

第1に貧富の差の容認だ。まず、年功序列の自然消滅を容認する。そうすると一般人の年収は彼らの能力が落ち始める45歳辺りを境に、例えば事実上の「45歳第1定年制」を容認することに依って年収を半減させて資産の国民への散逸を防ぐ。それとともに、貧富の差も容認してせいぜい生活保護を広くする程度でかわし、米国型の「富裕層1%が国の税収の半分を担う」と言う形にもっていく。これら一連の容認により、より確実に税収の増加が図れる。

## 瞑想録(その9)

更に年金額の引き下げや医療費自己負担率の増加など、平均的国民の実質的可処分所得の目減りを図って、その余剰分を税収とする。更にインフレも相対的に、国民の個人保有資産の減少、つまり税収の増加につながる。人は物事がいきなりだとパニックって反対するが、じわじわだと不感症になるものだ。

しかしここまで国民を締め付けかつ社会構造を変えて、なおかつ大和魂を保つ余裕が日本国民に残るのであろうか。これに対する答えはおそらく安倍さんも明確には持っていないことだろう。日本人が金の亡者になってぎすぎすして、それでもなお「おもてなし」をするのだろうか。これはおそらく将来の課題である。安倍さんは「取り戻す」と言っているがその真意は、「時代の先取りによるこれに合った大和魂の未来志向的再構築」なのだから。

## 9、感じると思う

以前に「ウィキペディアから学ぶこと」と題した記事で、事物の認識段階を「現状・心象・言葉・論理・数字」の5レベルに分けた。右に進む程抽象度が高くなりまた法則化しやすいが、同時に机上の空論に終始する危険も増してくる。ここでこの5段階は、連続的に変化する対象を強引に5分類してあるだけだ。だから分け方は、その分け方に意味があってかつそのラベルとしての言葉さえ存在すれば、いかようにも分けられる。そこで今日は特に前3つの段階を「認識しない・感じる・考える・表現する」の4段階に分けてみる。心象についてもっと接近するためである。

認識しない、これは画像が網膜に映ったまま、あるいは五感の刺激そのままでは何の解釈も行わない、単なる信号のレベルである。死ぬ前に走る走馬灯がこのレベルに近いだろう。茫然自失で皆目見当がつかないとか、頭が真っ白だとか言うのもこのレベルだ。一番素にアナログな状態ではあるが、認識作用を一切拒否しているので作業にアナログ能力は不要である。ヨガの至高の境地と言われるのもこの状態である。最も客観的であるが、日常生活には不便かもしれない。

次に感じる、これは例えばラーメンの汁を吸って「ふーん、こう言う味か」と感じることである。別のラーメンを吸うとこれはこれで、「今度はこう言う味か」とか「さっきの味に近いな」などと感じることである。感じるからには何らかの認識行為が伴っているが、その作為度は低く、およそ言葉にもならなくて「ふーん」と言う感じである。あるいは蚊に刺されて「痛い」とか「痒い」とかそんな風に素朴に感じることである。「昨日より痛いな」とか「段々痒くなってきた」みたいな感じ方もある。アニミズムの人が四季自然に囲

## 瞑想録(その9)

まれてそのありがたさにしみじみ感涙するのも、このレベルであるから、基本的な宗教体験はこのレベルにある。言い換えるとこのレベルを持たない宗教は、人工的でカルトになりやすい。

痛いとか痒いはそもそも茫洋とした感じであるから、これはその感覚の「中心と範囲」を持った、典型的なアナログ集合の世界である。そして、痒いが高じると痛く感じることから、「痒い」のアナログ集合から段々にずれてきて、両者の重なりと言うか境界の辺りを過ぎて、隣の「痛い」の領域に入っていくと言う連続操作が想定できる。こう言ったアナログ集合のあり方全体がアナログ幾何である。この幾何は基本的にローカルであって、常にグローバルにできるとは限らない。特に、面白い幾何になるのが矛盾を内包する場合である。

矛盾は論理レベルにすると、あってはならないことであるが、感じるレベルだと矛盾はむしろ味わいとして感得される。そもそも事物は多面的であるから、同じ物が同時に矛盾する特性を備えることは自然であり、それをそのまま感じるだけなのだ。アニミズムの感動も多分に矛盾にある。役行者(えんのぎょうじゃ)が修業の末に蔵王権現を感得したのも、このレベルである。そして矛盾は、ブーメランが裏返しになって返ってくるような、メビウスの帯のような幾何を取る。これは感じるレベルに幾何がある典型例である。

更に次に思う、これは感じた物に更に思念が入ることである。ここで思念には該当する言葉と言うレッテルは無くても良い。例えばある記事や物語を読んだ時に、読後感想としての全体観を得る。この全体観は「思う」のレベルにある。もし「感じる」のレベルに居るならば、全体観と言うまとまった物には至れない。「感じる」は体で、「思う」は頭でやるところが、一番違う。カマーズフの兄弟のような長編を読んでも、その全体観は「あの感じ」と言う1点になる。これは驚くべき集約能力だ。そしてそれは各章の位置づけとは別途にあって、かつ各章の単純和でなく、時には矛盾していたりもする。あるいはピカソの絵について、「彼はあの感じ」と言う思念空間上の点打ちも思念である。

ある記事を書こうとして、当初の構想は「あの点」であり、他方書き上がった原稿は「この点」だとして、しばしばこの点があ那点に至っていないことがある。何となく不満足な状態である。この時は「どこが足りないか」と言う引き算を思念し付け加えることによって、より「あの点」に近づく。つまり演算ができるのだ。但しこの「思うレベル」になると、異なった思い同士、これはそれぞれについてはアナログ集合であるけれども、比較考量行為やそれ以前に「その2点について比較したい」と言う動機付けは、それら2つの

## 瞑想録(その9)

アナログ集合に元から付随しているタグ同士によってなされる。だから、比較されるアナログ集合があたかもジグソーパズルの各ピースのように、バラバラに収納されていても全く困らない。この意味で「思う」のレベルではそろそろアナログ幾何から離れて行く。

最後に表現する、これは他人との交信や自分の備忘録のために文字化することである。これが文字化本来の目的であると正しく認識するならば、文字を読むまたは聞きたびに、その受けては字面ではなく、それがより深い所で意味する心象、つまり「感じる」レベルや「思う」レベルにいちいち帰らないと、同感しそこなって上辺を滑ることになる。一神教や主義主張がしばしばカルト化しやすいのも、物事を表現レベルや論理レベルでしか見ない習慣を強制されることにより、生きた体験ときり放されて、現実から遠ざかり架空の世界を本来だと思い込まされてしまうためである。

さて本日はこのブログのテーマの一つでもある心象について、より細かくそのありようを探ってみたものである。心象にも大きく「感じる」レベルと「思う」レベルがあるとしたほうが分かりやすい。そしてそれぞれのレベルに長短がありながらもどれも捨てがたい。それは、こう言う心象行為が本能に直結しており、かつ本能の働きは自己の安全と生存にあるのだから、外界のありように依って瞬時に適切なレベルで対応する柔軟性が命の有無を左右するためである。その意味では現実の場面では人の心はこれらのレベルを混ぜこぜにして、トータルとして効率良く的確に対応しているし、そう言う柔軟な能力こそが本来求められているところである。

なお、以上の議論ではアナログ幾何が、視点としては重要なもののどの程度の幾何になるかは十分に説明できていない。これは今後の課題とする。

## 10、アニミズムの構造

先日心象について「無認識・感じる・思う・表現する」に分けたが、アニミズムは典型的にこの内の「感じる」レベルに該当する。感じるのであるから体全体を通しての感得である。四季折々の自然のありよう、太陽や山や川や滝や岩や森や、あるいは花や虫や雪や月その他あらゆる森羅万象に接して、しかも目だけでなく耳も鼻も手も肌も全てを使って感じて、そのめくるめく美しさ、自然に抱擁されているありがたさ、この上ない居易さと安定感に思わず感涙して、さらにその奥に八百万の神々の存在とその完璧な守りを見出してこれらに感謝する、そう言った身震いする感動がアニミズムの本質である。



## 瞑想録(その9)

これは全体としての感動であるから、部分に切り分けても、また対象個所を特定しようとしても無理である。私たちを取り巻く環境すべてから発せられる、これは波動であり、我々の五体はこの波動に総合的に共鳴している状態にある。こういう感動は論理では全く無いので、感性が鈍い人や特定の思想教導により五感を活かすことを禁じ手とされている人々は、不幸なことにいくら理屈を座学で学んでも、感じることはできない。

ところがこう言った感動は、一旦獲得すると例えば一杯のお茶や一輪の花、あるいは山水画や枯山水庭園に依っても触発起動されて、その小さなもてなしが心に響いてくる。これが茶道や華道の心である。あるいは琴の音や雅楽の調べ、鹿脅し(ししおどし)の音や雁の飛び去る声等に依っても、この身震いする感動は呼び起こされる。更にあるいは古城の侘びや拍子木の音、たわわに実った稲穂、お祭りと神輿等々、日本にはこのようなアニミズムのきっかけが山ほどある。

そしてこのアニミズムのダイナミックな波動、これは点集合とはおよそかけ離れた物である。まず基本的に分散系であって、一神教の絶対神のように一点には集中しない。一神教はモノトーンであるが、逆にアニミズムの波動は極めて分散的かつ多様的であって、とても一言では言い表せない物である。アニミズムの心を概念しようとしても、それは無い。アニミズムの心は体で感じ取る物であって、頭で思念するものではないからだ。アニミズムをまとめてはいけない。ただその波動をあるがままに忘れずに置くことだ。

宇宙規模に大きな総体とその感得、同時に極めて微細でかすかな音色の感得、その感得した感覚とは、全てを含み、最大と最小を含んでいる。この感覚に至ったとの確信があれば、それは主観が同時に客観であって、誰か先達の印可を受けなくとも感得(悟り)に至ったと断定して良いの。他方でまだその実感に至いるとの納得がないとすれば、その人はまだそのアニミズムと言うアナログ集合の中心的位置には居ないのであろう。ちなみにアナログ集合とは、それが大であれ小であれ、その全体像と内部構造を感得することに本質がある。

アニミズムとは体験であるから座学は不要だが、修業は絶対とは言わないものの価値がある。それは修業が体全体に依る実践だからだ。例えば峰駈けをするとか、鈴を鳴らしながら呪文を唱えて山道を歩くとか、もっと簡単にハイキングをするだけでも良い。より深くより長くこの境地に浸れる。アニミズムの境地は広くてかつ深いのだ。そしていくらでも広く深くなれるのだ。

## 瞑想録(その9)

どの程度経験したらアニミズムを知ったことになるか、その明確な境界線とかはない。そもそもアナログ集合だからだ。至高の境地にまだ至っていない人が自分は何が足りないのか、これはあるいは修業に依って自ら、あるいは先達の見立てに依って導きとして、見出すことができる。ある人は素朴な心が足りないだろうし、またある人は逆に余計な知識や思いこみが多すぎる。またある人は論理に拘りすぎて矛盾を受け入れられず、従って波動を感じる事ができていない。波動とは矛盾である。

アナログ集合という視点からは、アニミズムの構成要素である山や川等のそれぞれも、より小さいもののやはり独立なアナログ集合であり、アニミズムの源泉である。アナログ集合は全体として感得できるものであれば、その大きさや、部分か全体か等を一切問わない。なお逆に、山や川でさえあれば、あるいは四季自然でありさえすればすべて無条件にアニミズムではないことは、一神教を生んだパレスチナの地の厳しい、はねつける自然を引き合いに出せば明らかである。

アニミズムの心は万人共通なのであるが、他方では一人ごとの個性もある。その意味で先に言及した「中心」も点ではなくて範囲なのだが、その境界もより広いもののやはり線でなく範囲である。この意味でアナログ集合は山に例えられる。山頂もすそ野も有るのだが、どこから上かと聞かれても一言では言えない。広がるすそ野の各方面は、それこそ無限種類の方向がある線香花火のような感じなのだが、「反対方向なら逆の意味」といった単純なものではない。まず我々の住んでいる空間の基本である、次元のイメージを捨てないと理解できない。

またこのアニミズム空間に隣接する空間とは、「分かるには少し足りない人たち」の総体である。ただ総称と言っても、実は「どこが分かっているか」の分かっている種類によってもっと小分けすることができる。また、「分かっている人」と「分かっている人」を合算すると全部になるはずだから、ある意味円や球のように完全になるのであろうかと思うが、この問いは愚かである。更にどちらが外でどちらが中と言うこともない。また、今球に例えたが、本当は球と言うよりもっと捉え難い実態だ。

最後にアナログ集合としてのアニミズムの神秘であるが、第1に矛盾が本質であること(固有にひねりがあるので全体像は単純でない)、第2に粒子でなくて波動であること(最小単位にも広がりがあり常に呼吸している)、そして第3に表裏一体、上下左右も全部一体で、従来の常識では認識できないことである。ちなみに距離は無いが、局所的には相対的な「遠い近い」はある。

### 11、日航123便着水仮説

日本航空の東京発大阪行き123便が御巢鷹山に墜落してから、もう30年が経った。30年と言えば1世代分だ。ところでこの事故に関連して、「もし羽田に戻ろうとせずにそのまま真っすぐ駿河湾に着水していたなら、もう少し多くの人が助かったのではないか」と言う仮説を、あの事故の後からずっと持っていた。今回はこの件について瞑想してみた。

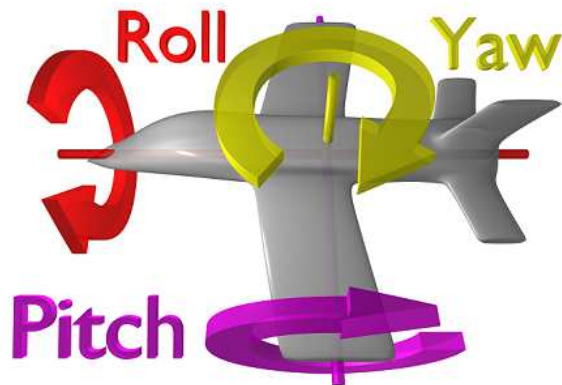
事故の直接の原因は、飛行機後部の隔壁の破裂に依って、3独立系統ある油圧制御装置(ハイドロ)と後部垂直尾翼が、同時に吹き飛ばされたことだ。そして隔壁の破裂はボーイング社での整備不良が原因である。さて、この事故原因に照らして、この型の飛行機の安全設計は一体どうなっていたのであろうか。

先ずハイドロだが、独立3系統付いているのは多重防護の考え方に依る。つまり、何らかの事情である系統が不作動になっても、最低1系統残っていれば飛行機の制御は可能な設計なのだ。だがここには構造上不可避な弱点があって、飛行機の尾翼近くの辺りでは機体が細くなるために3系統がまとめて1束になり、どうしても独立でなくなってしまう。それも有ってか、主翼のフラップには補助の電動駆動機構が付いていた。

次に隔壁であるが、これは単一部品なので、故障の可能性はもちろん想定していた。ただしその想定は、「一部破断してもその破断が全体に発展しない構造とする」と言う解決法だった。そして完全品ならばそうであることは破壊実験等で証明済みだった。ところが現実には補修作業員の不注意で、しかも監督まで見落としていたために補修が不完全で、瞬時に全破断して一気にハイドロ全部を吹き飛ばしてしまった。

続いて同時に吹き飛ばされた垂直尾翼であるが、この役割は大きく2つあって、第1に、その立ち方から分かるように飛行機のヨーと言う左右ダッチ不安定と、ロールと言う飛行機の胴体を回転軸とした時の主翼のシーソーの不安定を防ぐ役割である。そして第2に、垂直尾翼の後縁に付いたラダーに依って左右方向の舵取りをすることである。今回の事故ではこれらの機能がまとめて吹き飛んでしまった。

## 瞑想録(その9)



以上を総合して、ハイドロと後部尾翼がまとまって吹っ飛ぶと言う事象は発生確率が無視できるほど低いとして、安全設計上は想定外事象になっていた。ただ、不良修理までいちいちエンドレスに考慮していたらおよそ物など作れない。そこで構造物は何でもそうなのだが、人的修理の瑕疵の問題は多重のチェックでクリヤーするべしとの立場を取っていた。これがこの事故の想定外の根本である。

ところでハイドロと垂直尾翼の両方が吹き飛んだタイミングだが、この機の航路図(下図)を追う限り、コックピットが異常を感じて直ちに羽田に引き返す決定をして機を右に向けるところまでは作動していることから、隔壁爆発後瞬時に全破断と言うよりは、少し間をおいて徐々に脱落して行ったと思われる。と言うことは、この旋回の判断は機長としては当然ではあるものの、もし代わりに着水を決断するか、あるいは爆発の瞬間に全破断して着水を余儀なくされたらどうなるだろうかと言う仮説は、有って良いことになる。





## 瞑想録(その9)

さて、機が右旋回をして北向きになった時点で機は制御不能になったようで、その後の航路図はかなり乱れているし、フライトレコーダー等でもヨーやロールに加えてピッチも厳しくなって、事実上制御不能になっていた。機の水平安定飛行を保つことに集中するのがやっとで、それ以上の飛行方向などおよそ考えられない状態だったと思われる。

実際所与の状況での機の制御の自由度は、左右のジェットの推力差と補助の電動フラップ制御だけであった。しかも破損箇所はコックピットから見えない位置にあるために、機長たちは異常事態の全体像がつかめず、ハイドロは計器の故障ではないかと考えて何とか作動させようとした形跡もある。

このようにして最初はヨーとロールだけだったのに、その内にピッチ(首の上げ下げ)の不安定が増幅し、それによって機は危険な機首の上げ下げを繰り返しつつ高度を急速に下げて行き、そしてついには失速して尾根に突っ込んだ。飛行機は首を上げすぎても、主翼が気流に対して邪魔板のようになってしまっただけで失速墜落するのだ。その墜落時の推定速度は、落下に依る加速度も加わって、通常の飛行速度を越える600km/hour 位と推定されており、これが被害を更に大きくした。

と言う訳で、終局時点で機が激しいピッチを繰り返していたと言うことは、およそ不可能だったがもし羽田まで戻れたとしても、おそらく滑走路に激突して大破したであろう。またもし着水を選択したとしても、水平に着水できずに海中に突っ込んだらろう上に、もし奇跡的に着水できたとしても、後部が隔壁破裂で穴空き状態のために直ちに浸水の上で沈没して、いずれにしろ絶望的だったと推定される。

では、もしここで破損が垂直尾翼だけだったらどうだろう。やはりピッチは起こるがハイドロ制御は健全なので、かなりの割合をフラップ操作で減衰できるだろう。左右の操舵は左右エンジンの推力差で何とかできるから、羽田なり横田に帰れば、あるいは無事に水平着陸できたかもしれない。着水と言う選択も同様にありだ。

逆に、破損がもしハイドロ全部だけで尾翼は無事だったらどうだろう。ピッチはさほど大きくならないだろうが機の制御は左右のエンジンの推力差でやるしかない。補助の電動のフラップ作動機構は反応が遅すぎて逆効果の恐れすらある。この場合は羽田に帰るのも難しかっただろう。ただ、ピッチはより少なかったら失速は無く、御巢鷹山への激突はもっとゆるやかで、もっと多くの方が助かったかもしれない。いずれにしろここは、ハイドロ全滅が想定外事象であることが効いてしまっている。

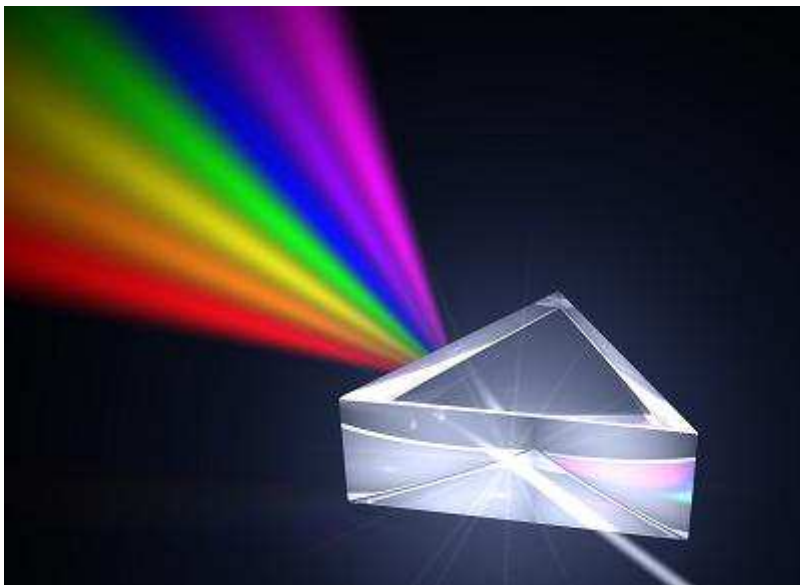
## 瞑想録(その9)

と言う訳でこの事故に関して言えば、着水の方がまだ多くが助かったと言うことは、どうもなさそうだ。エンジンが全停止したが制御系は全く無事だった、ハドソン川に無事着水したサレンバーガー機長の場合と、こちらもちろん凄腕だが、故障の種類と程度がかなり違う(あたかも逆)なのだ。

### 12、物理と感覚

本日は前半で色の三原色の話、後半で疑問詞の話をします。いずれも、外的かつ客観的な物理と、内的かつ主観的な心象が如何に違うかと言う話です。

先ず光、これは電磁波です。虹の7色とも言いますが、可視光は赤が最も長波長で 700nm 程度、青が最も短波長で 400nm 程度です。赤より長い光は赤外、青より短い光は紫外で、いずれも人の受光体では感知できません。ここまでは物理です。

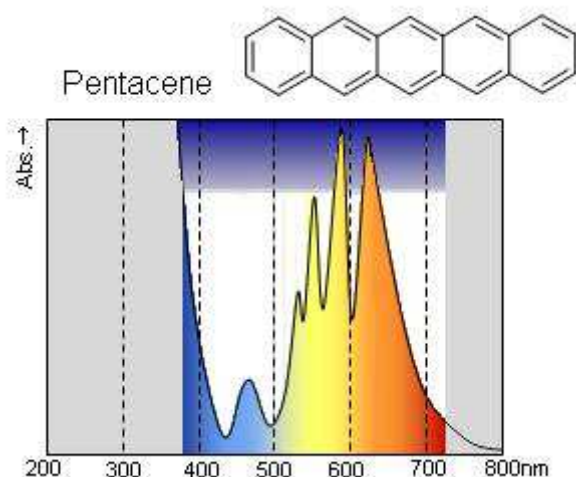


他方で「光の3原色」が知られています。「光の全ての色は、赤青黄の3原色の混合で表される」あるいは「物の全ての色はシアン、マゼンタ、イエローの3原色で表される」と言う仕組みです。ここで光と物で異なるのは、光は色そのもので加法混合、つまり色が全部混じると白になる構成であり、他方物の色は光の反射に依るために減法混合、つまり色が全部混じると黒になる構成であるためです。そして「全ての色はこれら3原色の混ぜ具合の調節によって作り得る」との立場を取ります。これはかなり強烈な統一理論です。

## 瞑想録(その9)

ところでここで素朴な疑問が起こります。プリズムの図を見ると分かるように、青の外で紫外ぎりぎりのところに紫がかった色が、赤外ぎりぎりのところに黒がかった赤が見えるのですが、これらの色がどうしてより内側の赤・青・黄の3原色の混合で表現されちゃうのでしょうか。混ざると言うことは按分のはずですから、より外側の色は原理的に表現できないと思うのですが、実際には紫は青と赤の混合で、黒い赤は赤に少しの青と黄を混ぜることによって作れてしまいます。

実はここに物理と感覚の違いがあります。まず物理的な色ですが、実際の光が単色光であることはめったにありません。例えばペンタセンと言う物質は薄青色に見えるのですが、吸光スペクトルは下図のようになっています。



全体としてブロードですが、黄と赤の部分が特に突き出ている、この部分の光を良く吸い、青い部分の光は少ししか吸わずに反射してしまいます。この結果総体的に青く見えるということです。ですから同じように「青く」見える色素、例えばジーンズを染めるインディゴのスペクトルは、同じ青と言ってもかなり異なっています。

そして3原色モデルは、これらの連続可変なスペクトル形状を全部まとめて、あたかも単色光の「青」としてしまいます。3原色モデルは猛烈に情報を落としていることが分かります。加えて3原則モデルは、光の見え方についての近似です。ですから波長の順に並んでいなくて、色相環と言って輪の形(繰り返し)になります。これは完全に感覚の世界で、ここにはもう波長の秩序はありません。物理と感覚はその原理が全く異なっています。

## 瞑想録(その9)



加えて3原色モデルはあくまでも近似で、本当に全部の色を出せる訳ではありません。例えば3原色を全部混ぜても本当のまっ黒にはなりません。そこでプリンターインキは3原色のほかに黒のカートリッジが付いている訳です。また、「透明感」も出せません。透明感とはデザインで出すしかないので。それでも人の感覚と言う複雑な物を、波長の物理に引きずられることなく、ほぼ3色に還元したこのアイデアは、知恵として偉大であると言えます。デジタルな機械では永遠に出来ないでしょう。

ちなみに動物によっては受光素子が多少異なるために、色の見える範囲や見え方がそれぞれ異なってきます。ですから3原色モデルは人にだけ当てはまる近似であり、例えば牛やイカでは見え方も、また透明・非透明も異なってくるでしょう。その意味でも3原色はあくまでも人の感覚の場合のみの還元法です。

続いて5W1Hの話をして。5W1Hは、客観的思考のための重要な6種の疑問のことで、「どこ・いつ・誰・何・どうして・どのように」の6疑問のことです。ちなみにドイツ語だとこれらがきれいに6Wになります。でも素朴に、森羅万象に関する千差万別の疑問が、なぜこの6個に還元出来てしまうのでしょうか。

ここにもまた、外界物理と内的感覚の根本的原理的な違いがあります。5W1Hを整理しますと、4次元時空に関する「いつ・どこ」、主体客体に関する「誰が・何を」、素朴な疑問の因果に関する「どうして・どのように」の3つに大分けでき、かつそれら3分けそれぞれの内部での役割も明らかです。ちなみに前2組は基本的に外的世界に関する、そして最後の組は内界に関する疑問詞です。これらより5W1Hの6疑問はいずれも、独立かつ必要不可欠であることが分かります。ではこれらで全ての疑問を言い尽しているのでしょうか。



## 瞑想録(その9)

5W1Hは、where, when, who, what, why, how ですが、これら以外の疑問詞を考えると、例えば which があります。あるいは複合語ですが how many があります。これらは加えなくても良いのでしょうか。加えても良いですが、現状の6疑問ほど基本的とは思えず、いずれも what や how で言い換えられてしまえます。また逆に考えると、6疑問も広義には何らかの形で本能の作用による、感覚としての「何」にまとめられるようにも見えますが、感覚レベルならともかく思考レベルで1つと言うのは、分析的思考ができる道具とも思えません。

逆に「何」と言えば「何」は、「何が」「何に」「何を」「何のために」と4つに分けることも考えられますが、まとめて「何」の方がすっきりとしています。色々考えても結局は、現状の6つに落ちてしまうのです。ただこれも将来に、もっと分析的な新人類が出現すれば、もっと小分けした方が落ち着くことになるのかもしれません。

本日は色と疑問の例を用いて、客観と主観、物理と心理が、根本的原理的に、同じことを対象にしても全く異なってくることを見てみました。これは意味論全体についても同様であって、「意味を解釈するにはその意味される物が持つ客観的特性はほとんど重要でない」と言う一般則に至るのではないのでしょうか。

私は物心ついた時からSFなどを読むたびに、「宇宙人は人間と感覚がまるで異なっているのではないか」とか「宇宙人になってみたら物事はどう見えるのだろう」とか「幽体離脱したら事物はどう見えるのだろう」とか「今強制されている常識はほんの愚か者のローカルルールに過ぎないつまらないものではないか」などと言う妄想を持っていましたが、本日の記事はその回答の始まりとも位置付けられます。



曹洞宗大本山総持寺の開祖の瑠山禪師は、弟子入りした峨山禪師に、「月は2つある、分かるか」と問いかけます。峨山禪師は長い座禅を経て、「1つは実相の月、もう一つは心象の月」と答えて印可されました。そして今回の記事で見た物理と感覚の大違いは、この答えの偉大さを再認識させてくれました。現実では、直観レベルから論理レベルに至るまでの、深く広い経験が役立って、人に深みを与えるのでしょう。

### 13、逆に見る大東亜戦争

初めに断っておきますが、私は戦争史の専門家でもなければ、当サイトは特定のイデオロギーに翼賛するサイトでもなく、ただ諸事象について瞑想するサイトです。特定の思想信条に関するコメントはご遠慮ください。

大東亜戦争で日本は降伏した。この要因についてはこれまで何度も触れてきて、①軍人の官僚化、②戦線の過大な広がり、③辞めるタイミングの見通しの欠如、④精神力の過大評価とシステム思考の欠如、等を挙げて来たが、本日は更に、⑤二正面作戦を強いられたこと、を検討してみたい。

二正面作戦とは具体的には、中国戦線と太平洋戦線の二方面だが、二正面作戦は戦略的には下策である。それを強いられたことそれ自体に、日本を取り巻く欧米列強の誘導、更にその奥には日本がアジア全体を目覚めさせることへの欧米の危機感があった。だがその手に載せられた日本にも「神国である」と言う妄想があって、冷静に対処できなかった。せめて中国戦線を収めてから太平洋戦争に臨むべきだったのだ。なぜ中国戦線を収められなかったのか、それ以前に石油も何も出ない中国戦線のぬかるみになぜ嵌ったのだろうか。

思うにその大元は日露戦争の勝利にあった。日露戦争の講和で、日本は朝鮮における優越的地位と、南満州鉄道の運営権を得た。当時のロシアは首都のサンクトペテルブルクから遥かに離れたアジアの東端の権益拡大になぜか必死で、満州鉄道敷設の目的には日本の属国化も狙いに入っていた。だから満州におけるロシアの影響力を削ぐ必要はあったが、満州鉄道を所有する程の必要性はなかったように思う。要するに朝鮮を緩衝地帯化すれば十分だったのだ。

初代朝鮮統監の伊藤博文元首相もこのような見通しの持ち主だった。伊藤は朝鮮を併合する気はなく、あくまでも親日的に自律的防衛をしてくれば十分であると考えていた。もし安重根が伊藤を暗殺しなければ、韓国併合も満州国樹立にも至らず、今

## 瞑想録(その9)

日の在日問題もなかっただろう。つまり朝鮮は自分で自分の首を絞めたようなものだ。

また、満州権益の入手に於いては、米国が共同経営を持ちかけたと言われる。ポーツマス条約締結の際に、満州経営への米国参入の密約があったとする説もある。いずれにしろ日本はこれを蹴った。そしてこれが、米国が日本に危機感を抱くきっかけとなった。もちろん、戦争当事国でない米国の満州経営参加は、はっきり言って調子が良いすぎる。だが、欧米全体が有する全アジア植民地化構想、もっと言えば根強い白人至上主義を考慮した時、「ここで米国に一枚かましておけばその後の展開はかなり変わっただろう」と思わざるを得ない。

さらに欧米が本格的に日本に危機感を感じたのは、第一次世界大戦の漁夫の利的勝利で、それまでドイツ領だった中国の青島等の租借権と南洋諸島の委任統治権を日本が獲得したことだった。この時点で日本の膨張は欧米列強の許容範囲を越えてしまったとして良い。英国は日英同盟破棄に動き始め、米国は日本の軍事力を押さえるためにワシントン軍縮会議を呼び掛けるに至る。

さて、中国戦線の方であるが、日本は「せっかく得た満州の権益を最大限に生かすべきだ」という積極姿勢に転じ、多くの兵隊と開拓団を送った。ところが日本は海外運営のノーハウに乏しく、特に関東軍は海を隔てた向こうにあって半独立的行動を取ることになった。そして特に清朝末期やその後の革命下にあった中国を押さえやすいと見て、中国大陆に本格的に進出した。そもそも「朝鮮を日本の防衛線にする」という最低限の目的が、いつの間にか満州に、そして中国本土にと、際限なく拡大してしまった形である。これも思慮が足りなかった。

もちろん中国軍は強くなかったが、国土は広大だった。あの広大な国土を収め切ろうと言う発想がそもそも無茶であったのに、気付くことができなかった。秀吉の時に懲りていればあるいは適度な收拾に向かったかもしれないが、それも出来ずにただただ無意味な消耗戦にはまっていた。典型的な「エントロピーの落とし穴」だ。そしてそれを見透かした欧米は蒋介石の中国軍を後押しするようになる。そして蒋介石は調子に乗ってポツダム宣言に参加し、そのまま国連の常任理事国入りをする。

さて、国力や経済力をどの物差しで測るかで違っては来るものの、日本は長引く中国戦線で消耗して、昭和16年の日米開戦時には既に国力が落ち始めていたと指摘する筋もある。とするならば日米開戦はなおのこと無謀であった。そしてその無謀を読み切れない、大和魂の過信と言う世間知らず、井の中の蛙の日本人大衆と軍部があ

## 瞑想録(その9)

った。政治も梶を切り切れなかった。昭和天皇の危機意識も、立憲君主制の下では限界があった。こうして明らかに下策の太平洋戦争に、日本は嵌っていった。

日本は敗戦したとはいえ、日露戦争の勝利に続いて、太平洋戦争ではアジア各地の義勇兵を養成し、また宗主国である欧州諸国を一時的には追い払うことによってアジア諸国を勇気づけた。実際戦後に、アジアを始め世界の多くの国が独立できた。ただこの事実をもって八紘一宇や五族協和と言った理念を正当化するのも、行きすぎであろう。日本はアジアの地元兵を訓練したが、それはあくまで日本が勝利するためであって、もし勝利していたらそのままアジアの盟主に居座り、むしろ地元兵を圧迫する方向に向いたであろう。それは素直に認めて反省しないと、戦没者の霊は浮かばれない。

そうではあるがそれ以上に、アジアの諸国民や将兵たちがもし、「自分たちは寝て居ても日本人が欧米と闘って我々を解放してくれる」などと本気で期待していたとしたら、それこそお人よしが過ぎると言うものだ。そう言うことを前提にして今さら日本を逆恨みしたとしても、それこそ見当違いもはなはだしい。自分の国は自分で守るのが当然だ。

その一例が韓国だ。私は国粋的韓国人の何人かと話をしたことがあるが、彼らは総じて、「自分の手で日本人の親玉(伊藤博文)を始末した」ことに無類の随喜を感じていた。だがその実その随喜の裏には、「本来なら韓国程度が日本の首など取れるはずがないが」と言う劣等感が存在していることに、彼らはおめでたいことに気づいていない。

### 14、35歳

先日NHK教育テレビの、「人生デザインU29」(29歳以下)と言う番組で、弱冠24歳で独立して阿蘇山麓の自然村に住み、月3万円の自給生活を送っている小山和音さんと言う人が紹介された。肩書きは「音楽AIデザイナー」となっている(AI＝人工知能)。小さいころから音楽に目覚め、大学には行かずに音楽の専門学校で技と感性を磨き、今は土地勘の全く無かった阿蘇山麓の限界集落で、自然と融合した生活を送りつつ、あくまでも自分発見として音楽活動を続けている。地元の付き合いや祭り等にも積極参加し、月収の3万円は地元雇用でなく、たまにお呼びがかかる講演の謝礼等の雑収入であると言う。もちろん独身だ。



## 瞑想録(その9)

欧米等海外には、こう言った既成のエリートコースを敢えて歩かずに、自らの道を氣ままに歩く人が結構多いのだが、日本のような世間体第一の画一社会では珍しい。日本では、「エスカレーター式に大学を卒業してそのまま企業で一生勤めて退職金をもらって老後は悠々自適」と言う、決まり切った人生経路がデフォルトになっている。そう言う私も実は他人の批判はできないが、過去の同級生や同僚等のあらゆる知り合いを振り返ってみると、ことごとくこの手の小さく老成した奴らばかりで、2度と会いたいと思わない。

その点、日本にもこう言う骨のある若者が居たことを大いに嬉しく思う。願わくはもっと増えて欲しいものだ。若い時から老齡年金ばかり頭にある奴らばかりでは、日本もおしまいだし、余りにもつまらない。「全員まとめて生まれてくるな」と思える程だ。日本と言う国の国民性にも問題があるとは思いますが、そう言う無言の圧力に負けずに自分探しをする、青臭いと言えればそれまでだがまだ若干24歳だ。何度でも失敗できる余裕がある。

彼のライフワークは今、電子音を用いた実験音楽の製作で、そのためにはあらゆる既成概念を振り払って素の自分と自然を見つめることが重要なので、その意味では限界集落での自然一体の生活は、ライフワークのための必然でもある。取り囲む人々も自然も全てが目標の肥やしでもあるのだ。月3万円でやるには漫然としていてはダメで、生活様式のすべてに節約の工夫が要って、これも彼のライフワークの肥やしになる。時にはこういう生活体験についての講演依頼も舞い込むと言う。

番組では彼の講演も実況していた。講演に続く質問タイムで、「自分も同じ人生を送って来た」と言う40過ぎのおじさんが、「君の理想は良く分かるし評価するけれども、おそらく発散して終わるだろう、君の発表は浮いた言葉のオンパレードだった」と辛口のアドバイスをしていた。私もこのおじさんに全面的に賛成である。小山君の今後の発展を楽しみにはしているものの、「いつか挫折して普通の人生を送ることになるだろう」ことはたやすく予想できる。世の中の市井にそうそう変わったことなど無いのだ。

似たような失敗をして今があるのが、米国のオバマ大統領である。彼は人間愛にあふれた人物で、若いころシカゴの貧民街の人々に同情し、彼らの生活を向上させる市民運動を始めた。ところが彼の最大の失敗は、「貧民は欲の無い人たちで、だから貧しいので、自活の援助と指導さえしてやれば自立できる」と、思い込んでいたことだった。実際彼が接した貧民たちは、実は成金以上に強欲だったのだ。そしてこの現実を知って皮が1枚剥けて、そして今のオバマがある。

## 瞑想録(その9)

小山君も、もしものになるのなら35歳くらいまでに一皮むけるだろう。旧住友銀行の磯田頭取(当時)は、「35歳前に金をためるバカ、35歳を過ぎて金をためないバカ」と言った。名言である。ここで金とは、より広く自分の経験に置き換えられるだろう。35歳前の安月給の時に自分の人格形成に投資しないでちまちま金を貯めたって、ダメな人間ができ上がる上にそんな金など直ぐに無くなってしまう。他方35歳過ぎて脂が乗っても前後の見境なく金を浪費しているのも、これまた度し難いバカだ。そしてその境目は35歳だと言う。

小山君もおそらくその初心貫徹は原理的に無理だろうが、それまでの努力に依って35歳までには、漫然と社畜をやっているような若年寄には得られないような素晴らしい境地、つまり大人(たいじん)の悟りに至るだろう。そしてその悟った小山君が、35歳を過ぎてどのような活動をするのか、大変楽しみである。激動の世界にあって日本を引っ張って行けるのは、もっともらしい言葉をちりばめた作文に終始して格好をつけている従来型エリートではなく、小山君のような人たちのはずだ。

少し話が変わるが、油断を許さない現在の国際関係の中にあって、日本が国家の最低機能としての国防力を整備しようとするのは当たり前として、それには資金的背景が必要と言うことでアベノミクスと言う仕組みが提案されている訳だが、もはや成熟してしまった日本経済が、先の大戦よろしく、大和魂と言う根性論だけで成長するとは思えない。結局アベノミクスは、①国民全員の負担を徐々に重くして国防につぎ込む、②貧富の差を容認して米国風に上1位%から税金の半分を取ると言う仕組みに、公言はしていないがならざるを得ない。

そうなってくると、今の若者の年金開始は早くても70歳以降になり、終身雇用はなくなって人生二毛作(45歳第1定年制)になり、年功序列はなくなって45歳過ぎたら賃金は下がり続けるようになるだろう。そう言った、「50年働きつめて引退したらすぐに要介護」と言う夢の無い時代、余裕のない時代の到来を見渡すならば、人生の1毛作目は小山君のような人生を送る、その結果老齢年金が不足したって、そう言う人が増えれば政策で何とかなるはずだ、こう言った賢くて楽観的な見通しに立った方が人生はよっぽど楽しいというものだ。もはや「年金数えの安楽人生」など無い。

自分の人生の主人になろう、奴隷になるな。

## 15、夢と解釈(その1)

## 瞑想録(その9)

私のライフワークの1つである、アナログ集合と蓋然推論の主要な応用分野として、外界の物理とは対照的な内的な心や感覚の世界がある。その観点からは「夢」は格好のテーマなのだが、なかなか解析が難しいことや、文字による再現性に限界があること、また夢の記憶の揮発性が高くてすぐ忘却してしまうこと等により、今まで目立って扱ってこなかった。だが、昨晚にたまたまいくつか夢を見てその内に今でも記憶が鮮明な物があるので、以下に書き留めてかつ自己分析を試みる。

夢の始まりの時点で、私は会社に居た。定年を過ぎて嘱託で週に3日ほど出勤しているという設定だ。職業は現場監督で、幾人かの若い職人に指示を出している。そうは言っても私は年長の嘱託だから職人たちは皆私を遠巻きにしている。そのために煩わしい人間関係には巻き込まれない。ここで「あれ、俺って最近会社に行っていたかな」などと言う素朴な疑問が浮かんだが、「まあ気楽なら良いや」と直ぐに納得した。

会社は如何にも現場の飯場風の大部屋で古くて狭いのだが、会社の建物自体はSFにも出てきそうな円筒形の超高層ビルで、その中心をエレベーターが上下していた。この会社ビルと大部屋は、なぜか今までも何回か夢に出て来たものだ。そして私のその時の仕事は、会社の外壁を這う冷却パイプの取り外し工事だった。手慣れたどうということもない仕事である。今日もそろそろ帰宅のころになったと思ったそのとき別の監督がやって来て、「あんたのところの若いのが共用の梯子を家に持ち帰ってしまっていて困っている、直ぐに返してくれ」と言ってくる。

仕方がないのでそいつと連絡を取ろうとしたが、個人情報保護の関係で自宅の電話が分からない。ちなみにその「若いの」はなぜか、小学校時代の知り合いがやっていた。もう定時になってみんなそろそろ帰宅して行く。私はその中から本部所属の庶務の女性を見つけたので、その役は本当の庶務の女性がやっていたのだが、事情を話して若いのに連絡を取りたいと頼んだ。ところが、その普段は気の良い女性社員はその時に限って、「うるさいわね、もう帰宅時間なのよ」と、怖い顔をして去ってしまう。

しょうがないなあと言う訳で私は、まだ会社に残っていた別の若いのを数人引き連れて、エレベーターではなく会社ビルの外壁に回された螺旋階段を下りて行った。ちなみにその従順な若者たちに特に現実での心当たりや印象は無かった。そしてあちこち探したが梯子は無かった。そうこうしているうちに若いのが、「この冷却パイプはぼろぼろでもう使えないな、それに冷却材にフロンを使っているから人体毒と環境排出基準があって、優に数100万円の大工事になりそうだ」などと言い出す。

## 瞑想録(その9)

言われてみるとこれは納得せざるを得ない。「何で梯子1つがそんな大げさな仕事になっちゃうのだよ」、元々仕事が大嫌いな私はあたかもだまされて泥沼にはめられたような嫌な気分になって、全てを投げ出そうと部長に文句を言い、自分の部屋に帰った。大部屋なので同じフロアーに別の部も同居しており、そこにいた社員たちが私の剣幕に驚いていたが、この光景も何度も夢に出てきた光景であり、しかもその驚いている社員たちは、本当の同期社員たちがやっている。

そうして部屋に帰り、「もうこんな会社なんかやめてやる」と、自分の荷物をまとめ始めたところで夢は終わった。こういう、夢が発散して未解決のまま爆発するということも、私の場合よく経験するところである。以上が昨夜5つくらい見た夢の一番記憶に残った夢の概要だ。

さて、この夢についていくつか分かるところを推量してみる。なお、夢の全てとは言わないが、かなりの部分がビジュアルであるので、そのビジュアルな部分は言葉による表現や伝達には大きな限界がある。また、ビジュアルと言ってもテレビや映画のスクリーンのように完全な2次元ではなくて、奥行きもあるし、しかもピクセル方式ではなく重要なところがより詳しく描かれていて周囲はぼけている感じだ。

円筒形の超近代的なビル、これは多分昔見たテレビ番組の「タイムトンネル」とかの影響だろう。それに対して小汚い大部屋、これの方が現実の会社に近い。新入社員の時代に現場の古参社員から、「良い仕事さえすれば会社のきれい汚いに文句を言う奴はけしからん」などと、かつての軍隊の新兵いじめのようなことをしつこく言われていて、その時の嫌だった印象が残っているのだろう。

ガラッと態度が変わった女子社員や、どんどん雪だるま式に膨らんでいく仕事、これらは私が会社に居て最も悩まされた、そして日々恐れていたことである。くそまじめにやって居られなくて直ぐに仕事を投げってしまうのも、私の常套手段だった。お陰で同僚や上司に嫌みを言われた等して、これも気分の悪い思い出だ。ただ、今回の夢には出てこなかったが、夢の中の超近代的な会社ビルの3階には社員食堂があり、その昼飯は超美味しい。これは私のB級グルメ好きな性格の反映なのだろう。会社でも昼飯が唯一の息抜きだった。

やはり今回の夢では出てこなかったが、会社ビルはオフィス街の一角にあって、回りもさほど高くない物のビル群で、中には〇〇省などと看板を掲げたいかめしいビルもある。良く私は会社を抜け出しては、3軒隣りのビルに入っている本屋に息抜きに行く、



## 瞑想録(その9)

そういう場面も良く出てくる。これは根がヒッピーでくそまじめが嫌いな性格の反映であろう。

全体として感じた教訓は次の通りである。夢占いの常道とは、「家は財産の象徴だ」とか「家が燃えている夢は近いうちに良いことがある象徴だ」とか象徴で解釈する傾向があるが、私の見る夢に関する限りそこまで抽象的ではなくて、むしろ現実にあったちょっとした、心の片隅に無意識に残ったような事や無意識に恐れていたようなことが、現実を離れた形で互いに繋がって、半合理化されて一連のストーリーとして、夢の中で表出すると言った感じがする。

だから夢の全貌は解明できないものの、その要所々々に自分が無意識に気になっていた物が何であったかを知る手がかりがあるように思う。逆にどうしても理解できないのが登場人物たちで、どちらかと言うと印象の薄い、もう忘れていたような昔の知り合いが、本来出ない場面で顔を出す。これは何を意味しているのかは分からない。もちろん夢の全部が合理化できたらおかしいし、それらに覚醒後に無理矢理に理屈をつけるのもぶち壊しである。これらを、時をかけてほぐしていく過程にこそ蓋然推論の姿が際立ってくる、つまり夢が生きてくるのだと思っている。

### 16、15年度ノーベル賞総括

今年も10月半ばになって、毎年恒例のノーベル賞の発表になった。いざ蓋を開けてみると、事前に有力機関が予想した人々はことごとく落選して、成果はあるが格がもう1つの、「その次」的な人が軒並み受賞した。こうなると、「受賞できるコツは事前予想に名前が挙がらないことだ」とまで言いたくなる。

日本人は目出度いことに、医学・生理学賞と物理学賞の2個をもらった。今世紀になってからは1年平均1人の割合でもらっている。特に今年は2年続けての快挙だ。こう書いているとさも私がノーベル賞崇拜者のように見えるが、私はノーベル賞をさほどの物と思っていない。私なぞがおよそ賞に縁がある筈はないから、これは悔し紛れに言っている訳でないことは明らかだろう。人の業績など長い期間に熟成する物なのであって、一時の華やかさなど意味がないと言っているのだ。その意味では、すぐに数字の順位をつけたがるオリンピックも同じ事だが。こう言う「勝った・負けた」に一喜一憂しているうちは、日本もまだ一流国でない。

さて、とは言えここ数年、特に今年の日本人のノーベル賞を概観してみよう。先ず大村智先生だが、その分野は極めて泥臭いもので、環境中微生物の採取とその創薬へ

## 瞑想録(その9)

の貢献が受賞理由だ。特にその前者、つまり泥とかカビとかから微生物を拾い出し、培養の上で生合成された新規有機物を見出し、それを創薬方に回すという、夏休みの課題みたいな仕事、これは一言で言えば、今は死語となった博物学である。その実行に微積分学も量子力学も要らない、ただただ忍耐の仕事である。

この先生はおそらく何千という微生物を培養し、何百という新規化合物を見出し、そのうち10個くらいについて誰かが何らかの薬効が見つけてくれて、しかもその1つに失明の原因となる原虫を殺す効果があって、結果として数億人を救った。その実際的功績に対して授与されたものだが、薬効を見出したのは別の学者であるし、また大村先生は薬効に興味があったのではなくて微生物とその発酵現象に興味があっただけなので、「数億人も救った」は偶然の結果に過ぎない。だが偶然でも成果があれば賞になる、これはまあ功利主義の世の中ではそうだろう。

大村先生は、代表的な地方大学である山梨大学の学芸学部をやっと卒業して夜間高校の先生になった人、失礼だがその知力の中程度であろう。発酵現象に感動したと言うから、山梨ならではあるが、ちょっと違えば杜氏にでもなっていたかもしれない。それが忍耐と強運でノーベル賞、こう言うノーベル賞の取り方は、7年前の下村脩先生に近い。下村先生もその業績は、何万匹ものクラゲを地道に採取して蛍光たんぱく質を抽出したことだが、それが遺伝子工学に役立つことを示したのは別の先生である。下村先生の学歴も地方の長崎医科大学の、それも医学部でなくて薬学部である。後述する物理学賞の梶田先生も、大学は地方大学の埼玉大学卒だ。

更に例を挙げると、梶田先生の指導教官でやはりノーベル物理学賞を取った小柴先生は、東大を出てはいるが頭が悪く成績全滅で、退学勧告寸前だったと言う。また、昨年に青色発光ELDで物理学賞を取った中村修二先生も地方大学の徳島大学出身だし、有力候補であつたが受賞を逸した向山光昭東大名誉教授も、「戦後のどさくさで無試験だったから入学できたが、時代が今だったら高卒」と述懐している。

大村先生や下村先生の研究スタイルはおよそ最先端ではなく、むしろ1世紀前の博物学者の牧野富太郎とか南方熊楠を想起させる。今だったらさしずめ、高校教師とかが趣味で地元の生物や岩石や古文書を調べて歩いているようなものだ。必要なのはただただ熱意と、あとちょっとしたひらめきだけであるが、こういう努力は名もないパティシエだってやっている。

梶田先生の場合は一応素粒子論なので、一度は先端学問を通過しなければならなかっただろうが、やっているのは同じ実験の繰り返しで、これも慣れてくれば印刷工場

## 瞑想録(その9)

の輪転機係りのおじさんのようなものだ。そもそも小柴先生がカミオカンデ施設を作ったのも、陽子崩壊を実証するためだった。そしてその巨大な光電子増倍管の塊をただ同然で作ったのがこの先生の成果で、「学問だけでなく経営能力も抜群」などと書かれているが、実はメーカーの浜松フォトニクスの屋間社長の自主的な男気なのである。

しかも装置建設に当たって小柴先生が依拠した陽子崩壊の論文は、程なく間違いであることが分かって、つまり小柴先生は論文の間違いを見抜けなかった訳だが、作ってしまったカミオカンデ施設を今さら「要りません」と言う訳にも行かなくなって、苦し紛れに「ニュートリノ振動観測施設」と言うことにしたところ、瓢箪から駒で当たってしまったと言う訳だ。しかもこれを陣頭指揮したのは故戸塚洋二先生で、本来はこの先生がノーベル賞をもらうべきだった。そして今回の梶田先生は、戸塚先生の指示に従って仕事をしただけだ。

もっと言わせてもらえば、ニュートリノ振動に2つものノーベル賞は要らない。そんな余裕があるならばむしろ、素粒子理論の最先端である超弦理論の開拓者にこそ、賞を与えるべきだろう。だが南部洋一郎先生の例でも分かるように、物理と言う分野は実験偏重で理論屋は賞に遠い。理論の方がよほど頭を使うのだが、実証されないと誤った理論に賞をやってしまうことになることを、授賞側は恐れるためだ。

さて、本日の議論をまとめると、「ノーベル賞は地方の時代だ」と言う総括になる。とすると新たな疑義が浮かんでくる。第1にノーベル賞とは何であるか、第2に教育とはどういうものかだ。第1の問いに対する答えを言うと、ノーベル賞は頭の切れの良さの指標では全く無いということだ。だから「いくつ取った」で騒ぐのは愚の骨頂だ。第2の教育の意義だが、今の教育は客観思考重視である。これは習得すべき重要な基礎能力ではあるが、それ以上ではない。健全な超主観や全人教育が教えられていない。

そして本当に地方の時代ならば、「地方大学は地方用の人材育成に徹しろ」と言う無言の位置づけと、予算の傾斜配分の現実を見直すべきなのか。これも直ちにそのようにはならないだろう。東大京大卒と地方大学卒では母集団の大きさが違いすぎるのがそもそもの原因だからだ。だからここは、「科学技術のすそ野の広がりにより、地方大学にも彼らの能力に合った分野が増えて来たので、そこででも頑張れば君たちにも名誉はあるよ」と言うのが、今年のノーベル賞受賞実績から得られる総括的教訓になる。

## 17、地アタマカ

先日「15年度ノーベル賞総括」と題した記事で、近年のノーベル賞がもたらす教訓が、「地方大学出身の頭が中の上レベルの人が一番活躍する」と言う、従来の常識を覆すものだったと指摘した。要するに「出来過ぎてもダメだ」と言う皮肉なものだ。これをどう考えたら良いのだろうか。これからの偉いさんは、前厚生労働省次官の村木厚子さんのように、ちょっと歯車が違えば田舎の中学の先生だったような人がやるべきで、その方が隣国や大国の脅威に打ち勝てるとでも言うのだろうか。

ところでいわゆる「出来過ぎ君」は、一体日々何をやっているのだろうか。外務省とかを見ると、大きい国の大使はほとんどが一流大学出だが、他方で稀代の首相で今太閤と呼ばれた田中角栄元首相は、コンピューター付きブルドーザーと言われながらも中卒であった。大企業のトップも概して一流大出が多いが、日立製作所の今の社長は徳島大卒、また経営の神様の一人である京セラの稲森和夫さんは鹿児島大学卒だ。

私は若いころに仕事の関係で、とある研究所と関係したことがある。そこにはプロパーの研究員のほかに、NTT、東芝、日立と言った超一流企業からも研究員が出向していた。そこに伺った時に聞いた彼らの会話である。

A「私は東大に受かる自信がありました。一応慶応と早稲田も受けて全部受かって、やっぱり東大に現役で入りました。」

B「東大に受かると分かっているのに何で3つも受けたのですか。私は東大しか受けませんでした、もちろん現役合格ですが。」

この人たちは当時45歳～50歳くらいだった。この年で外部出向と言うことは、出向元ではほとんど期待されていないで出世もない、いわゆる冷や飯食いなのであろう。だがだからと言って特にいじける風も全く無く、仕事の受託研究はあっという間に済ませて、Bさんはルービックキューブの自己最短記録の更新に血道をあげ、Aさんも「革新的プログラム」を作っていたが誰も理解できずに結局お蔵入りになったと言う。

私はここに元神童たちの墓場を見た。もちろん彼らがその後新聞をにぎわせたと言うこともない。明治維新の非常時ならともかく、今の平和な世の中に神童や天才は不要なのだろう。実業の世界は勿論、学問の世界すらそうなのだ。そして神童たちも、変に駆り出されるよりもマイペースの人生を送っている方が遥かに幸せのようだ。ある意味悟りを開いていたとも言える。神童のインテリカはたとえ世の中の生産力にならずに垂れ流されても、悟りを得るのが一番上等な使い方だとも言える。また、普通の人切り盛りできる余裕のある世の中は、いつでも部品が取り換えられるという意味で、システムとしては優れているのかもしれない。



## 瞑想録(その9)

「メンサ」と呼ばれる団体がある。ある意味フリーメーソンのような秘密結社なのだが、入会するにはテストがあって、地アタマが上位2%以内でないと入れないようになっていいる。テストの内容は非公開だが、大学入試よりは知能テストやSPIに近い、気付きや洞察力を計測するように出来ていると言う。そして会員には茂木健一郎さんとか、理系なのに1発で司法試験に合格した人とかが山と居る他方で、ニートやフリーターも多いと言う話だ。その広報は、「要するに普通の人と違いすぎて社会に適合できていないと言うことでしょう」と解説していた。ニートと天才は実は紙一重なのだ。

最近ひな壇形式のクイズ番組が流行りで、「インテリチーム」などと言って一流大学を出て芸能界に入った人々がチームを組んでクイズ大戦をするのだが、「一般チーム」に結構負けている。負け方にパターンがあって、教科書的な問題、例えば「平家物語＝諸行無常」のようなアチーブメント式の問いは完璧なのだが、「白ネクタイを上手に買う方法は」と言うような教科書に出てこない生活感の常識問題は丸でダメだ。要するに現行の学校教育はこう言う「形式頭」の生徒が評価されるようになっていいて、決して地アタマがそのものの物差しになっていない。ちなみにネクタイの問いの答えは、「駅のキオスクで表が白で裏が黒の合わせネクタイを500円で買う」だ。

なぜこう言うゆがんだ物差しで学力が測ることがまかり通っているかと言うと、他にもっと良い物差しがないということもあるが、基本的に現在の教育は優秀な奴隷を作るのが目的だからだ。優秀な奴隷とは、「どんな違った仕事を突然に指示されてもそれなりに格好をつけられる万能的に器用な人」のことである。会社だろうが役所だろうが、この手の人間が人事異動も含めて将棋の駒のように最も使いやすい。言い換えれば今の教育で最も欠けているのは帝王教育だ。

このように万能選手を選抜するのが教育と入試の目的なのだから、ノーベル賞向きのこだわりのある人は「優秀な人」に選抜されずに、中の上レベルの大学に落ちると言うことになる。これが今年のノーベル賞だ。ただ、中の上レベル大学の学生のほとんど全員はつまらない人たちで、彼らに隠れた「物になる人」は居てもその割合は限りなく低いので、結局は自ら頭角を現して呉れないと見出しようがない。地方大学は依然として、ノーベル賞をきっかけに持ち上げる程の総合力を有しては居ない。それに加えて「頭角を現す人」の動機は、大抵が単なる上昇志向に過ぎない。優秀な人の見出し方はこれほどに難しい。

前の記事でも描いたが、私はノーベル賞の業績は立派であるとは思いますが最高だとは思っていない。現在進行形で評価されるということは多かれ少なかれ既に引かれた



## 瞑想録(その9)

路線に乗っていると言うことであって、この時点で真に革新的とは言えないからだ。私が革新的だと思う人とは、①稲作を見出した人(豆腐の発明も含む)、②鉄器を最初に作った人、③犬猫馬を最初に飼いならした人、④山々に道筋をつけた人、⑤一族を引き連れてベーリング海を渡った人、こういう人たちだ。いずれも発想が途方もなくて、かつ前例がない。

これらの偉業を成した人々は、ノーベル賞受賞者と異なって、もはや名前すら知られていないが、その忘れられていることが偉大な証拠でもある。ではこれらを成した人々は、今で言う学業エリートと同じ種類の人間であっただろうか。あるいは戦国時代に名を挙げて諸大名になった人々が今生まれていたら、全員が一流大に入っていたであろうか。私はここに、「真に創造的な人々」が実は世の中でどのように分布しているかの、実像を見る気がする。

### 18、サルカニ聖書

以下ウィキペディアより引用

蟹がおにぎりを持って歩いていると、ずる賢い猿がそこらで拾った柿の種と交換しようと言ってきた。蟹は最初こそ嫌がったが、種を植えれば成長して柿がたくさんなっずと得すると猿が言ったので、蟹はおにぎりとその柿の種を交換した。

蟹はさっそく家に帰って「早く芽をだせ柿の種、出さなきゃ鉢でちょん切るぞ」と歌いながらその種を植えると、いっきに成長して柿がたくさんなった。そこへ猿がやって来て、柿が取れない蟹の代わりに自分が取ってあげようと木に登ったが、ずる賢い猿は自分が食べるだけで蟹には全然やらない。蟹が早くくれと言うと猿は青くて硬い柿の実を蟹に投げつけ、蟹はそのショックで子供を産むと死んでしまった。

その子供の蟹達は親の敵を討とうと、栗と臼と蜂と牛糞と共に猿を家に呼び寄せ敵討ちの算段をする。栗は囲炉裏の中に隠れ、蜂は水桶の中に隠れ、牛糞は土間に隠れ、臼は屋根に隠れた。そして猿が家に戻って来て囲炉裏で身体を暖めようとする、栗が体当たりをして猿は火傷を負い、急いで水で冷やそうと水桶に近づくと蜂に刺され、吃驚して家から逃げようとして牛糞に滑り転倒、屋根から臼が落ちてきて猿は潰れて死に、見事子供の蟹達は親の敵を討てた。

(引用以上)

さて、この説話でサルとは何者でありましょうか。このずる賢く高慢ちきな嫌らしい生き物、これはあなた方自身です。罪に凝り固まって膨れ上がっています。ではカニとは何者でありましょうか。カニのお母様こそ、実はあなたの罪の身代わりにカキの実に打たれて死んだ、あなたの救い主のイエスキリストです。罪は放っておくとどんどん大

## 瞑想録(その9)

きくなります。ウソがウソを呼ぶのです。カニのお母様は実はそれを御存知でした。そしてサルであるあなた方自身が悔い改めるのを、ひたすら我慢して待ち続けていたのです。

それにも拘らずあなた方は無情にも、そのカニのお母様の無償の愛を理解するどころか、返ってこれに怒りを向けて、ついに死に至らしめてしまったのです。何と嘆かわしいことでしょう。カニのお母様は種のカキを一所懸命育てて下さった。これもその深い慈愛からです。そしてカニのお母様はカキが育って立派に恩返しをしてくれるのを楽しみにしていました。でもあなた方はその救い主を石で打ってしまいました。

さてここで天の父なる神様の愛の奇跡が顕現します。カニのお母様は子供を残した、これは父なる神の御慈悲に依り、救い主はなくなってもなおのこと、この地上にあなた方のために救いの種を残して下さったのです。ここにカニのお母様はカニの子供たちとして蘇られました。死んで黄泉に下り、天に登り、全能の父なる神の右に坐し給い、そして7日後に蘇られたのです。

父なる神さまのご意思で蘇られたカニの子供たち、それに付き従う栗と臼と蜂と牛糞と言う名の4名、実はミカエル、ラファエル、ガブリエル、ウリエルの4名の天使なのですが、それぞれ圀炉裏、水桶、土間、そして屋根からお生まれになります。これは救い主様が飼馬桶で生まれたのと同様に、救いは貧しい所から生まれることの比喻です。蘇った救い主はこれら4名の天使を従えて地上に凱旋されました。

そして一致協力してサルつまりあなた方の罪を徹底的に攻撃されます。ついにあなた方の罪が死ぬ時がやってきました。と言っても皆さんそれぞれ自分の罪を顧みると分かるように、罪は簡単には死にません。死んだと思っても息を吹き返し、無くなったと思ってもまたむくむくと頭をもたげてくるのです。ですから子カニと天使たちはあるいは燃え盛る炎に依って、あるいはあふれ来る洪水に依って、またあるいは滑落の仰天に依って、さらにはあるいは大石による押しつぶしによって、これを完全なる死に至らしめます。これは黙示録の世界です。人間でおよそ、このハルマゲドン生き延びられる人はいません。全て救い主の御守りが必要です。

こうしてハルマゲドン生き延びたあなた方はもはや罪のない、父なる神の似姿に変えられて、金色に輝いています。主の凱旋です、ハレルヤ。あなた方はこうして、何の勲もない、取るに足らない者であったにもかかわらず、ただ一重に神様の御心により選びだされ、永遠に滅びない器とされたのです。なんとありがたいことでしょう。あなた方はただこの奇しい救いを信じさえすれば良いのです。修業や苦行は要りません。サ

## 瞑想録(その9)

ルが何か修業や良いことをしたでしょうか。

信仰によって蘇ったあなたたち、あなたたちはこれからただ一つのことを述べ伝えれば良いのです。即ち全能の父なる神はただお一人であり、カニとして地上に現れた救い主とはその御子であって、天使や精霊さまと三位一体の関係にあるということです。この奥義と秘儀を、まだ知らない人々に是非述べ伝えて下さい。この唯一の神様は限りなく慈しみ深いと同時に悪には限りなく厳しく、どうしても従わない人はサルのように打たれてしまいます。時は迫っています。救いと滅びの審判の時は間近なのです。さあ、今すぐ何人も深い信仰に入って、一人も落伍者の出ないことを祈っています、アーメン。

(説教終了)

このようにキリスト教の教理構成に、どうしても聖書がないと理論武装ができないと言うことはありません。日本と言う世界の端の、子供向けの民話からでも、同じ組織神学は作れてしまいます。逆に聖書からの引用だけで正反対の論理も作れてしまいます。キリスト教系のセックス教団すらあります。

この説教を聞いて何かすっきり来なかった人も多いでしょう。それは一神教の組織神学が余りに屁理屈に偏っていてみずみずしい感性が失われていることが、元の話が簡単だからこそ余計に分かりやすく浮き彫りにされているからです。一神教の教理など、この程度のものです。元の説話のままの方がよっぽど気持ちが良いでしょう。チャンチャン。

## 19、拍子

音楽には2拍子、3拍子、4拍子などの拍子がある。このうち2拍子は行進曲に多い。人の歩きがそのまま拍子になったのであろう。速度もちょうど人が行進する速度で、勇ましい響きの曲が多い。

4拍子、これはおそらく2拍子から派生したものであろう。該当する曲数はこの拍子が一番多いのではないか。2拍子2回でも良さそうな物だが、3拍目のアクセントが弱く、かつ全体としてゆっくりである。つまり2拍子の単純な倍数派生ではなく、もっと落ち着いた感じの独自の雰囲気をもっている。つまり拍子と言うのは単純な音の数え方ではなく、むしろ曲風の表現に、今はなっている。

## 瞑想録(その9)

以上の2拍子と4拍子が、基本的に歩行と言う人の自然の行為を起源としているならば、3拍子がなぜ起こったのか、これが不思議になる。起源の説は多々あり、中には「3拍子が一番古い拍子である」と言う説まであるのだが、実際のところは「歩行では単純すぎるのでそこに芸術としての面白味をつけようとした」のであろう。動作や踊りを想起すると、右足左足と1歩1歩進んだ後に拍手を1つ入れるとかである。

現在では3拍子と言えばワルツだが、ワルツの起源はドイツ高地のバイエルン(ババリア)地方からスイスのチロル地方で踊られた「レントラー」である。そしてレントラーはワルツよりもよほど早く、あたかも行進曲にもう1拍子入った感じで、しかも踊るときにシュプラッターと言って、手で体のあちこちをたたいて音を出す動作が入る。こう言う踊りには3拍子が最も合う。このレントラーが宮廷音楽に取り入れられてワルツになった。

ワルツと言うとヨハン・シュトラウスに代表されるように、その曲風は典雅である。上品で流れるようだ。つまりワルツに於いても、拍子は単なる音の数え方ではなくて、曲風の名称になっている。踊りも整備され、ワルツステップと言えば、「2歩進んだ後3歩目は後ろ足を前足にそろえてつま先立ちする」と言うステップである。このステップはカップルダンス、特に旋回を伴う物に向いているので、これが鹿鳴館などで見られた舞踏会の踊りの基本になった。

以上2, 3, 4拍子は4分音符を基調とするが、世の中には8分音符を基調とする8分の6拍子もある。「8分の6は約分すれば4分の3ではないか」などと言うのは野暮で、8分の6拍子はむしろ4分の4拍子が更に冗長になったような、ワルツとは全く異なった曲風である。ここでも拍子は曲風であって、単なる音符の数え方ではないのだ。

更に、拍子ではないが3連符と言う技法がある。1拍子を敢えて3等分して4拍子の中に混入させるのだ。するとその部分だけ妙に躍動感が出て、味わいが格段に違ってくる。ここでは3等分が重要で、2等分でも4等分でも感じが出ない。先のワルツも含めて、音楽では3がある種の秘数であると言えそうだ。芸術に於いては一見の無駄こそが必須であり、新たな次元への跳躍点である。

さて、ここまで3を持ち上げるなら、「どうして5拍子はないのか」と言う素朴な疑問が持ち上がる。実際は少しあるらしいが、ことさらに挙げる程ではない。「4歩歩いて拍手」だってあっても良いではないか。変化の妙が付いて面白いのではないか。理屈ではそうなるのだが、現実にはない。多分それらしい独立した曲風を、5拍子は少なくとも今のところ出せていないのだ。固有のステップも聞かない。5と言う数字がもはや現

## 瞑想録(その9)

代人の理解を越えているのであって、あるいは未来人ならば見出せるということかもしれない。同様に8分の8拍子も聞かない。

さてここまで来て、日本にはなぜか3拍子の曲がないことに気付いた。実はあって、例えば「みかんの花咲く丘」とか「赤とんぼ」とか「ふるさと」と言った日本の歌謡100選に選ばれているような代表曲が3拍子なのだが、いずれも明治維新に海外の影響を受けて出来た曲である。江戸時代前の3拍子と言うのは聞かない。強いて言えば「ナンマイダ」とか「観自在菩薩・・・」とかの経(おきょう)が実は3拍子なのだが、誰もそう意識して経を挙げて居ないし、「曲風」もワルツとは程遠い。

これはおそらく、日本のようなアニミズムのアナログの国では、音符の整数倍が拍子になるとか、小節の整数倍が曲になるとか、そういうデジタルな発想がなかったということだと思う。これは日本だけではなく多くの古代文明でも見られることであり、様式美よりも本質美を重要視していることの表れである。例えば謡曲や長唄と言った日本古来の音曲で重要視されるのは、節回しとかうなりとか塩梅と言ったアナログ的な雰囲気であって、デジタル的な割り切りはむしろ下手であり、心が分かっていないとされる。

現代の日本人の心の歌と言えば演歌で、これは音符に書けて拍子も有ることから、一見西洋音楽であるかのようにも見える。だがここでも、演歌のうまい歌い方とは、太鼓の達人のように整数リズムと音程を正確に再現することや、発音が初音ミクのようにぶれないことではなくて、それらの書かれた音符を元にしつつも如何に節を回すか、うなるかの技術である。

古代において音楽は舞踊とともに祭祀の重要な構成要素であった。いずれもその本質は振動(バイブレーション)であり、振動とは神秘であり、アルコールとともに人を酔わせるものであった。振動と言うと現代人は正弦波を連想するが、アナログ振動とはむしろ上記した古謡のように、心のままの広義での往復繰り返し運動である。音楽よりはステップの方が、デジタル化させる要素は強いだろうが、それでもデジタル化して形式化してしまうと、もはや神秘の例力はない。これらの東洋的節回しにこそ、正弦波でない真のアナログ波のヒントがある。

## 20、工学マインド3題

以前にも触れたように、工学、法学、医学と言った実用の学には統一理論は無いが、その代わりに「マインド」があって、個々の事実もさることながら、マインドを養うのがそ



の分野で一人前になる最大目標である。例えばリーガルマインドと言えば、法の下での平等(恣意性の排除)とか、罪刑法定主義とか、弁論主義とか、客観や物証の重視などが挙げられる。更には法律経済として、法と細則の分担や、簡易裁判の一発即決、あるいは実利に対応した立法などがある。

マインドのお陰で、世の中が新しい局面を迎えてもスムーズに対応できる。例えばEコマースとかDNA診断とか言った新しい技術が出てきても、それらの特性に対応してかつ既存の法体系と矛盾することなく、適切かつ十分な新法を制定することができるのだ。他方であり得ないことへの法の手当ては、無駄であり悪である。例えば杞憂に係る、「空落下対策法」などと言う法律はあり得ない。

工学マインドもいくつか挙げられる。工学とは物造りであるから、①安定な構造にする、②使用しやすい構造とする、③フェイルセーフや多重防護を仕組む等である。また、物造りは経済でもあるから、④無駄な部品をつけないとか、⑤経済的に成り立つ構造とすることなども重要だ。こう言った「正面からのマインド」は標準的な教科書等書かれているので、今日の記事では私が肌で学んだ究極の工学マインドを3題紹介したい。

第1の工学マインドは、「想定外は必ず起こる」である。「起こらないから想定外だろう」などと言うのは素人の屁理屈で、本当は「頻繁には起こらないから想定外」なのだ。例えば「起こる可能性は10万回に1回以下」などと定量的な根拠すらあるが、これは「10万回に1回しか起こらない」ではなくて「10万回に1回は起こる」なのだ。例えば阪神淡路大震災では震度7クラスの地震で、倒れないはずの高速道路が何本も倒壊した。幸いに早朝であったために大事故には至らず、大きな社会問題に至らなかったが。

「想定外が起こってけしからん」、これは一種の結果責任論であって、その起源は欧米キリスト教の、旧約聖書のモーセがモデルであろう。彼はごまんと良いことをしたが、たった1回つぶやいただけで約束の地を拒否された。米国FRBのグリーンSPAN元議長も、リーマンショックの前の日まではマエストロなどと称賛されていたが、リーマンショックを境に犯罪者扱いで、“I am sorry.”を絶対に言わない米国で「私が間違っていました」と言わされた。「結果が悪ければ必ずお前のチョンボがある」、この鉄則が結果責任論だ。結果責任論のおかしなところは、同じマージン削りがあっても結果に表れなければお咎めはない点、つまり究極には運不運を公的に責めている点だ。

## 瞑想録(その9)

高速道路や原発も「震度8クラスでも壊れない」、そういう構造物は技術としては作れるだろうが、バカ重くなってしまって経済的に成り立たない。そして「震度8以上の地震は無い」と言う保証はどこにもないのだ。その意味で人工物が「絶対に壊れない」などと言うことはあり得ない。想定外は日常茶飯事ではないものの、起こるのだ。福島原発だって、経営層の不作為はあったものの、寿命は50年の原発を千年に1回の地震に本気で備えるかと言うと、そうすれば原発のコスト優位性はなくなり、その結果準国産エネルギーと核武装技術が無意味に放棄することになってしまう。これは建設的な態度でない。30年前の日航機123便の墜落にも似たような事情があった。

第2の工学マインドは、「寝ている子を起こすな」である。ある時私の所属している会社に納入されたボイラーの内、H社製の製品だけが頻繁に壊れると言うことがあった。専門の先生に顧問になってもらって調査したところ、「流力振動でフローガイド板が共鳴破断した」と言う判定となり、H社も非を認めて直ちに無償修理した。ところが修理後にボイラーの修理を検収に行ったところ、ガイド板だけでなくもっと心臓部にも修理の跡があった。後日にその顧問の先生と話す機会があったので、この点について素朴に聞いてみたところ先生に、「決着がついている事象を蒸し返すのは良い態度ではない」と諭された。

会社の上司ならともかく、真理を追究するはずの先生から、「一番大事なのは無難に済ますこと」と言う処世術、つまり工学マインドを教えてもらった形である。たしかに工学に係る事象は複雑怪奇でかつ多様であり、その全てが解明されている訳でない。だから「周知の現象を犯人にして事を収めそれ以後問題がなければ良いではないか」、これは立派に工学マインドである。そしてこのマインドを敷衍するならば世の中の多くのこと、政治も経済も戦争も賠償も歴史も全て、実は「もっともらしい理由をつけて人々を納得させて済ませているのが実態だ」と言えそうだ。

そして第3の工学マインドは、「作る気の無い者は去れ」である。工学の目標は作ることなのだ。極言すれば作れて使えれば、それ以上の理由は要らないし、製品の製造に関係ない部分はどんなに事象として面白くても研究しない、これが工学である。この工学の意味を分からなければ、授業を聞いていても雑学ばかりでつまらないし、仕事をしていても充実感がない。授業の内容や実社会での経験は、新事実を発見するためにあるのではなく、次の物造りに生かすためにある、これが工学マインドである。水産学だって金になるマグロやウナギは熱心に研究するが、地球の生態系を全解明するなどと言う気はない。

## 瞑想録(その9)

世の中にはこの根本が分かっていない「工学者」が、たまに居る。技術評論の高木仁三郎とか原子力の小出元助教とか公害論の宇井純と言った人々だ。彼らには共通して、「人工物にろくな物はない」と言う固い信仰があって、それに理屈と根拠をつけているだけで、何の創造性もない。もちろん信仰の自由は憲法で保障されているから、彼らがそう言う信仰をもつのは自由だが、そう言う信仰に依拠する限り、たとえ工学部を卒業していてもその人は工学者ではない。工学マインドとは無縁である。

どうであろうか。ある意味裏から見た工学論、表から見た「良い子の工学論」よりもよっぽど、工学の本質を浮き彫りにしていると思うのだが。

### 21、学ぶと思う

「学んでも思わなければ即ち暗く、思っても学ばなければ即ち危うい」(論語より、現代訳)。人や本から学ぶことと自ら瞑想することは、車の両輪のようなもので、どちらも大切に欠かせないと孔子は言っている。ここで面白いのは、学んで思わない場合と思って学ばない場合で、リスクの種類が違くと孔子が宣言していることだ。たしかにリスクの種類は違う。

「学んで思わない」、これはガリベン学生に多いのだが、何を聞いても知って居るけれども教科書空覚えの定説しか出てこない。しかもそれが研究者として一番模範的な態度だと思い込んでいる。こう言うさも先生然とした個性の無い奴たちは、つまらなすぎてまた生体反応を感じなくて、一番付き合いたくない知り合いたくないタイプだ。だいたいこういう死んだ回答は、今やパソコンの方が上出来だ。

こういう超デジタル人間の特徴は、考える、瞑想すると言う人としての自然な行為であり本能の発露である行為を、偏った性格に依り主観の混入であると勘違いして、あるいは特殊なイデオロギーに凝り固まって、しないあるいは出来ないことだ。こう言う種類の人間と付き合っても、ぴかっと閃く、あるいはなるほどと思う面白さ、つまり電球のような明るさがない。即ち暗いのだ。ちなみに応用動作は一切ない。

逆に思っても学ばない、これは学の無い人が良くやる愚かなパターンだ。妄想と思い込みに拘りすぎて、あるいは理屈が余りにも無さ過ぎて、気付きはあるものの発散してしまっている、あるいは社会常識やマナーを明白に逸脱している、さらにはあるいは話語冗長な割に中身がなく要するに何を希望しているのか分からないと言ったパターンだ。

## 瞑想録(その9)

良くその辺のおばさんがスーパーの店員に、「こう言う物が欲しい」と主張しているのだが、昨日食べた物の解説から始めて感想ばかりでちっとも「欲しい物」に辿りつかず、さすがの店員もイライラしてくると言ったタイプだ。このおばさんなどまだ善良な方で、ずれっ放しで空気すら読めない人たち、あたかもバカに棍棒をもたせるとブンブン振り回して危なくて近寄れない、「バカの一つ覚え」を絵に描いたような人たちも多く、この手の人物に限って自分こそ正しいと信じてやまない。一番危険なのは疑心暗鬼に陥るとか独善に終始するとかして、「お前はキツネツキだ」などとやるタイプだ。つまり危うい。

さて、以上の解明を元に孔子の言葉に再び帰る。するとやはり、素朴な瞑想とその関連する周辺分野の学習、これらがいずれも必須であって、どちらかが欠けることはまるで思いも考えもしない人よりもよっぽど迷惑なことが分かる。では以下に、この「暗い」と「危うい」の例を幾人か、実在の著名な人物で見てみよう。

先ず、先の戦後の世界講和で単独講和でなく世界同時講和を主張した、元東大総長の南原繁センセー。「世界と戦争したのだから世界全部との同時講和が筋」、この主張は一見もっともで学問的には正解だ。だが連合軍だって一枚岩であったわけではない。むしろ皮一枚でくっついてただけで、各国特に米国とソ連の思惑はいちいち違っていた。この政治的現実を無視しての「同時講和」とはほとんど自殺行為であり、学問ならともかく政治としては兎戯に等しい。

ではこの時の南原は暗かったのかあるいは危うかったのか。彼は思ってもいたし学んでもいた。その意味では孔子の及第点をもらえそうだ。だが実際には学んだ内容が偏っていて、かつその点に気付かなかった。その結果発言が非現実で頓珍漢になっている。学者とかイデオロギストに良くあるパターンだ。同時講和を思いついたのだから思っただろうが、学びが偏っていた点で正しく学んでいない。つまり南原は危ういのだ。しかもその危うさは、学んでいない人よりも高い。もっとも偏りに気付かなかったという意味では暗くもあるが。

ちなみに当時ソ連を引っ張っていたのは独裁者のスターリンであった。彼はトロツキーの世界同時革命論に反論して、順次革命論を主張しかつ実践し、その現実性ゆえに成功した人物である。この人間模様が先の南原と同様であるところが面白い。理論的には「最終革命は同時であるべきだ」と言うトロツキーが正しいが、やはり現実的ではなかった。そして俗人のスターリンが政権を掌握したお陰で、ソ連は構造的欠陥を抱えながらも狡猾に戦後を生き延びた形になっている。

## 瞑想録(その9)

次の例に挙げるのは放浪の画家の山下清さん。この人は頭の方は薄かったが、日本を放浪して独自のスタイルで素晴らしい絵をたくさん残した。それでは彼は頭が薄かったので学ばず従って危うかったかと言うと、そうでもない。では考えなかったかと言うと、もしそうならあそこまでの創造性はなかったはずだ。現に暗くない。と言うことは、彼は聡明なのか。聡明とは少し違うが、彼は自分の分相応な居場所を自ら見出したと言うことであろう。場所にあったのだ。分相応、これも大切な指針である。もし彼に政治家の野心があったとしたら、話は違ってくる。

最後の例は元首相の森喜朗とする。この人は首相時代も今も、自民党総裁とは思えないほど常識がなく頓珍漢で、失政を繰り返し、「あいつが大丈夫と言ったらダメだ」とまで揶揄される程だ。では彼の頓珍漢は暗いのかそれとも危ういのか。この人は一応早稲田大学を卒業しているが、入学がラグビーのスポーツ推薦入学であるので、頭の程度は保証されない。その後弁論部に移りそれをきっかけに政界に入り、あとは分不相応なとんとん拍子で自民党の最大派閥の首領となり首相になった訳だが、はずみとは言えこのような非常識な人物が一国の首相になるとは、民主主義の危うい面を象徴的に示している。はずみの恐ろしさだ。

つまり彼は山下清と逆に、弾みで分不相応な地位についてしまったために、頓珍漢の繰り返しが見苦しいが、もし今ラグビーの選手だったら、まああんなもので許されていたことだろう。ただ一方で「地位が人を作る」と言うことわざもあるが、彼は地位に関わらず学べなかった。そして彼の相次ぐ頓珍漢な暴言は冷や冷やものである。その意味で彼は、暗いと言うよりは危ういタイプだろう。頭が悪すぎて学べなかったのだ。

それではもっとダメだった民主党の菅や鳩山はどうだったのかということになる。先ず鳩山は東大卒ではあるが、工学部卒のために常識が破壊されている。その意味では危ういのであって、つまり学んでいない、先の南原やトロツキー、あるいは天皇機関説の美濃部達吉のタイプである。菅は東工大だがやはり工学部卒で、常識がずれて居た上に、帝王学を全く学んでいなかったために大局を見る眼力がまるでなかった。この人物も危うい側である。

では有名な人で暗い人物に誰が居るかと言うと、首相級だと鈴木善幸あたりか。どんな事案も陰のボスの田中角栄の指示に従うだけで、彼独自の色とか方針とか打開策とか、そう言った物がまるでなかった。要するに思いつかないのだ。お陰でとんでもないことも起きなかったが何か進んだ訳でもない。典型的な暗いタイプで陰も薄い。この人に続くのが軽さでは歴代首相第一位の海部俊樹だろう。この人も人の上に立つた



めの創発力はまるで感じなかった。民主主義は「手間は取るが最低限は保証する」と言うが、最低限はこれほどに暗く危ういのだ。

### 22、共産主義

自由主義社会の本質であり美点は、各個人の選択の自由にある。だが、自由と義務は同じ事の裏表で抱き合わせなので、自由の行使や選択に於いては、その選択肢を選んだことに対する説明責任と結果責任が付きまとうことになる。そしてこれらの責任を果たすためには、人一人ひとりの最低限の義務教育がどうしても必要になる。義務教育では生徒35人を先生1人が受け持つ形で10年以上の教育を施すことになる。これは自由主義社会を円滑に動かすための代償なのだが、膨大な人数の教師と人件費、それに嫌がる生徒の強制が伴う。考えようによっては効率の悪い、言わば人類総体の無駄である。誰かがまとめて代行処理するシステムが理想的ではないか。

そして実は、これらの無駄を一切不要とする大変「結構」な社会システムが既にある。すなわち共産主義だ。共産主義では人一人ひとりの必要量は国家が測って供給してくれるから、自分で考える必要がない。また義務教育も、基本的に人は国家から要求された仕事さえこなせばあとは何もなくて良いのだから、最低限で良い。これは自由主義に比べて格段に全体効率の良いシステムである。現に初期のソ連はこのシステムで世界恐慌を乗り切った。

こう言う理由で共産主義にあこがれた人も、あるいは積極評価した人も居た。考えなくて良い、学習しなくて良い、一見楽そうだ。だが共産主義の場合、これらは正しくは「考えてはいけない」であり「学習してはいけない」なのだ。個人の学びや思考は単に社会資本の無駄な垂れ流しであって、悪だからだ。時計修理屋はねじさえ回せば、分数なんか知らなくて良い。兵士は機関銃の打ち方さえ知っていれば、自分が誰を撃つかなど知らなくて良い。だからかつて日本人のシベリア抑留の時、ソ連兵は人数を数えられなくて、その分長く寒い外に立たされて、抑留者は随分と難渋したと言う。兵士の方も、楽しみと言えど女かウォッカだけで新聞一つ読めず、実は非常に寂しい精神状態だった。

この共産主義の、「何もなくて良いのだよ」と言う社会効率最大原理は、実はその母体となったキリスト教に由来している。マルクスは「宗教はアヘンだ」と言ったが、マルクスが実は無意識にヒントにしたのは、他にヒントがなかったのでは仕方なかったとは言え、実はキリスト教である。単に「唯一の神」が「一党独裁」に置き換わっただけだ。キリスト教の至上命題は世界宣教であるがこれは世界同時革命であり、そのための

## 瞑想録(その9)

革命兵士のオルグ活動は即ち伝道と言う訳だ。カンパは献金で、路線闘争は異端審問だ。そして伝道活動は効率重視で行われる。キリスト教でも「ものみの塔(エホバ)」等新興系では効率伝道がより徹底されているが、それを更に極限まで徹底したのが共産主義である。

欧米人の食文化は、ミルク、バター、チーズ、クリーム、ヨーグルト等多様で、しかもチーズだけでも100種類以上あり、良くぞこれだけ工夫した物だと感心する。また、パン、スパゲッティー、ビール、ウイスキー、オートミール等、これまた多様である。だが実のところ最初のグループは全部牛乳の変形であり、2番目のグループは全部小麦の変形であって、実は全然多様でなく、むしろワンパターンで貧弱と言った方が良い。これと同じ事が、「キリスト教、科学技術、共産主義」にもワングループとして当てはまる。

そのキリスト教の殺し文句が、「あなたは何もしなくて良いです、ただ信じれば良いのです」だ。一見安楽でマーケットインなことこの上ない。そしてこの態度も共産主義にしっかり引き継がれている。だが私はここで声を大にして言いたい、「我々は修業をしたいのだ〜」と。余計なお世話と親切で、頼んでもいないのにしゃしゃり出てきて、人から修業をする自由を奪わないでくれないか。典型的な「小さな親切は大きな迷惑」である。そしてこの独善的な押し付けの最たるものが共産党である。

ところでこの共産党のもう一つの典型的な思考様式に、「世の中の進歩は全て必然であり、誰か特定の個人の力量に依拠するということはない」と言うテーゼがある。共産主義がキリスト教の焼き直しであると同時に、やはりキリスト教の焼き直しである科学の一分野で、マルクス当時最先端だった分子統計熱力学の影響である。つまり、「人類全体の観察されるマクロな動きは、それを構成する個性の無い個々人(分子)の、単に法則に従ったミクロな運動の総体である」という発想が元になっている。しかも当時量子力学はまだ発見されていなかったから、発想は完全に古典力学であり、つまりこちこちの確定論である。

このモデルに基づくと、個々の人は単に黒子の歯車に過ぎなくて、その個性や力量などと言う物はない。現実としてマクロに現れることは、「いつどこで誰が」と言うことと全く無関係に、歴史的必然として早晚現れる運命にあったものだと言うことになる。以前に「一神教の始まり」と題した記事で、一神教の発生には族長アブラハムの独特の個性が関係していたことに触れたが、そしてこれが普通の歴史の見方であるが、共産主義的史観に基づけば、一神教を愛好する人類の傾向とでも呼ぶべきマクロな性質は、アブラハムが生まれようが生まれまいが、初めから予定されていたと言うことになる。

## 瞑想録(その9)

つまり一神教は開祖に関係なく言わば奔流として、早晚必然的に人類に発生するのだと言う解釈になる。更にそれがキリスト教に変貌しそして共産主義で最終局面を迎えるのも、歴史の非可逆的な発展の必然であるということになる。こうして共産主義は御本家のキリスト教にも増して、排他的傲慢な優越的地位を占め、その一神教的要素である最終革命は主の再臨以上に世界同時でなければならないと言う結論が、理論的に導出される。これが世界同時革命論であり、バリエーションとしては南原繁の世界同時講和になった。ちなみに戦後の文化人の南原はキリスト教徒である。

人は革命の歯車であって考えてはならないのだから、考える奴は頭がおかしいと言う論理的帰結となり、当然に精神病院か思想改造所送りになる。これもその発想の大元は、一神教の神の全智全能遍在と言う超越性、神を無限とすれば人は有限でゴミにも等しく、そして「ただ御心がなりますように」"not my will but Thy will"、これこそが正しい態度であるとするものの、ストレートな翻訳である。そして異教徒である非共産主義国に十字軍を送って懲らしめるのは、まさに神の御心にかなった、この上なく美しい行いなのだ。

だから私は共産主義と言う信仰のことを、「キリスト教マルクス派」あるいは「マルクス・パウロ主義」と呼んでいる。最も異端なキリスト教がはずみで最も勢いを持つ、この現象は一時のものみの塔もそうだった。だがそのネズミ算も最近はあまり見なくなった。氷水かぶりと同じように飽きられるとか嫌がられると言うことは、人の健全として存在するようだ。隣国にまだ残る共産主義も、そろそろゴルバチョフ相当の人物が出現しても良いのではないか、それも歴史的必然として。

### 23、アメリカの繁栄と衰退

世界の近代史や現代の力関係を見るに於いて、また近代日本の発展を考察するに於いて、大国であるアメリカ(以下大陸名と切り離すために米国と記す)、特にその繁栄と衰退の状況は外せない重要な要素である。そこで本日は米国がいつどのようにどんな理由で大国になり、そして今なぜ相対的に影響力が縮小しているかを概観しておく。なおこの概観は、世界史を見渡すと「強大な1国の世界支配」と言う状況が結構目に付くが、「これに何か人類固有の共通原因があるのか」と言う根本的な問いの、手始めにもなっている。

アメリカは新大陸であり、コロンブスによる発見は1492年、メイフラワー号による清教徒移住の開始が1640年、イギリスからの独立は1776年、そして南北戦争が1860年である。ここまでの米国はひたすら発展の途にあった。その原動力は一言で言

## 瞑想録(その9)

うと「新規開拓の国」、つまり未開発部分を開発するだけで国力が伸びた時代であったからだ。少なくともこの時点で、米国の広い国土は、広いと言う理由だけで大きなポテンシャルであった。

南北戦争は日本が開国する少し前に起こった。理由は、北の工業化と南の奴隷に依る綿花栽培と言う異質の文化の対立であったが、北と南は覇権を求めて争いこそすれ、分裂して別国家になろうと言う意思はなかった。この時点で既に、領土が広いことのメリットは感じとっていたようだ。そしてこの内紛に依る消耗にもかかわらず米国はさほど衰えずに発展を続ける。未開のフロンティアが残っていたからだ。フロンティアの消滅が宣言されたのは1910年である。このころには米国は先進国の1つにはなっていたが、まだ超大国ではなくて、世界史は西欧を中心に回っていた。

そもそも1853年にペリーの引き入る米国太平洋艦隊が日本に寄港したのも、先進国として遅ればせながらアジアに興味を示した一環であった。米西戦争で勝利を収めて、フィリピンと言う初めての植民地を得たのが1898年である。日本との関係で言えば、1905年に日露戦争の講和の仲介をルーズベルト大統領が買って出たのは、それを以てアジアに足掛かりを得ようと言う米国のしたたかな計算があつてのこととされている。言い換えればこの時点では米国はまだ西欧に出遅れていた。

その米国が西欧にぬきこんでたのは1914年に起こった第1次世界大戦がきっかけである。この戦争では西欧をはじめ多くの国が巻き込まれたが、モンロー主義を貫く米国はほとんど参戦せずに、基本的に世界の武器生産工場としての役割を果たした。それに依って、「疲弊した西欧と大儲けした米国」と言う構図が出来上がった。

勤勉なアングロサクソン系清教徒を主軸とし、農業に適した平地を多く抱え、新開国ゆえの先取の精神を基本とし、ユダヤの資本としたたかさを吸収し、電子通信や自動車産業と言った世界をリードする工業技術の生産基地になることに依って、米国の地位は大きく向上した。貪欲な吸収力である。そして1929年の世界恐慌、西欧諸国は植民地を囲ってブロック経済で防衛したが、米国には該当する植民地がなかった。これについては米国も波にのまればしたが、摩天楼に代表される高度成長の余裕で乗り切った形である。

第2次世界大戦には米国も積極参加して日独伊と闘ったが、この時の連合国側の総司令官が、当時最も多くの植民地を持っていた英国ではなく、後に米国大統領となるアイゼンハワーであったのは、この第2次世界大戦当時に米国がその国力に於いて既に抜きこんでいたことを象徴している。対日戦線でも開戦当初は不利であったもの



## 瞑想録(その9)

の、直ぐに本気を出すとミッドウェー海戦を経て、あとは膨大な工業製品に依る圧倒的な軍事力で、力の勝利を収めている。特にそれまで世界の中心であった西欧が、この戦争を契機に植民地のほとんどを失うと、米国は世界の中心に躍り出ることになった。

そして終戦の1945年からソ連崩壊の1991年まで、これは米ソの2題超大国に依る冷戦の期間であった。この間に米国は、モンロー主義を捨ててはいなかったが、「自由主義を守ることが即ち自国の防衛である」との立場から、自由主義国をその膨大な工業力と経済力、それにドル基軸通貨と国際連合のコントロールに依って、事実上世界の警察官を自認する程に、国力に余裕があった。石油の輸入に依る工業生産と広大な農地による農業力で、名実ともに世界をリードしていた。米国の最興隆期である。

但しこの間にも米国の国力は徐々に衰退の兆しを見せる。そのきっかけは皮肉にも、自由主義防衛のための遠隔地域での諸戦争での不覚な泥沼化であった。朝鮮、ベトナム、イラン、イラク、アフガニスタン等、いずれも勝利することなくあいまいな撤兵に終わり、国内に厭世的雰囲気と公民権運動の機運を醸成し、これらの内紛は、いつか解決すべきだった矛盾であるとはいえ、これら負の遺産が一気に噴き出した。また徹底した合理主義は工業生産技術の後進国移転により国内空洞化をきたし、ドル基軸通貨の重荷もあって万年貿易赤字と大量の失業率それに治安の悪化を招いた。

こうして、20世紀初頭に米国を大国に持ちあげたその同じ原因が今度は負の要因に転化して、米国は徐々にその国力が減衰していった。と同時に、戦後独立したアジア、アフリカ、南アメリカ等の諸国が、各自独自に国力増強に努めたために、「米国1国のみが超大国」と言うある意味非永続的な事態は徐々に解消して、世界は多国化の一途をたどっている。ソ連が崩壊した以上は世界も米国に世界の警察官を求める必要が薄くなり、その分諸国が米国依存から脱却する機運を醸成したことも大きい。

それでも米国の、日本に沖縄を返還したような正義と正直を愛する性格、もちろん国民全員が正義と言うわけでは毛頭なくて、むしろ拳銃社会に見られるような緊張の高い野蛮な国民性ではあるものの、その目先の不利を承知で敢えて自由と正義を守ろうとする精神は、依然として世界平和のために必要であり、仮に米国の国力が将来もっと衰えたとしても、この国と同盟して人間の尊厳の象徴である自由と正義を守る戦いは永遠に必要であると思う。

(注、随所でウィキペディアを参考にしました)



## 24、社畜さんありがとう

以前にノーベル賞に関する2回の記事で「大きな発見」をアップしたが、今日は対照的にちまちましたカイゼンの話を取り上げる。なお、ちまちまの方が日本人のお家芸であって、その日本人が最近ノーベル賞をなぜか結構取っているその理由については、次回にアップする。

最近いろいろな物が目に見える程に品質が向上し便利になって来て、しかも手に届かないほど高い物でなく、我々庶民にとってはありがたい限りだ。身の回りの物品に特に多い。もちろん第1に挙げるべきはスマートフォンに代表される通信機器及び一般電気製品であるが、うちはエンゲル係数が高いのでやはり食品関連に目がいく。身の周りと言う意味ではカジュアル衣料も安い。

食品で目立つのは、インスタント食品、スーパーやコンビニの総菜や弁当、さらには鮮魚や野菜等の品質が目に見えて、価格上昇なく向上したことだ。お陰で今まで大きく世話になり、大げさに言えば彼らのお陰で貧しくても行きのびて来られた、牛丼屋、ラーメン中華チェーン、ファストフード、パスタ屋、ファミレス等、1品500円程度で座って食べられた店が、今はたいしてありがたく感じなくなった。インスタント等に比べて、わざわざ出かける割に大してうまくないのだ。

普通のパスタをサイゼリヤにわざわざ出かけて500円で食べるより、自宅で1袋100円の冷凍パスタをレンジでチンした方が、楽でしかも美味しいのだ。400円の牛丼や1000円のこだわりラーメンに、自宅で作る100円のカップ麺は負けていない。700円も出してマクドナルドのハンバーガーを食べる気にはなれない。更に彼ら同士の競争もある。コンビニがハンバーガーやドーナツを売る時代になって、ドーナツチェーンは存亡の危機にさらされている。もう仁義なき戦いで、今日は大丈夫でも明日は分からないと言う時代だ。彼らもおそらく経営の転換を、場合によっては廃業を迫られることだろう。

食料のほかにも洗剤やせっけんがグーンと伸びた。おかげでクリーニング屋や銭湯はチェーンを除いて個人経営はほとんど消滅した。また昔は名物だった商店街、これも今では効率がよっぽど良く品質も値段も保証されているスーパーに取って代わられている。その分個人商店主つまりお山の大將が減って、一億総雇用人時代、総奴隷時代になってしまったが。でもトータルとしてこの近代化を断る気にはなれない。商店

## 瞑想録(その9)

街の風情は今でも好きだが、もう何年も利用したことが無い。家も土地代を除けばほとんど工場生産だし、車も一家一台、エアコンは一部屋一台だ。

これらの工夫は、火おこしの発見や稲作の発見に比べれば、もちろん極めて小さな物だ。凡人でも思いつく小さなカイゼンの無数の積み重ねである。だからこれらの工夫を実行した人々は、ことさら有名でもないし特に感謝も称賛もしていないのだが、実はありがたい人たちなのだ。そしてこの無数のありがたい人たち、彼らこそが社畜であり、一億総社畜時代だからこそ、大革命は無いにしろ日々の目先の暮らしは飛躍的に豊かになってきているのだ。

だとしたらこれ以上ない蔑称であり、私自身も死んでも二度とやりたくない社畜、彼らは実は「志の高い博愛主義者だ」と言うことになるのではないのか。ところが現実はその真逆だ。彼らが日々目先のちょっとした改良に励んでいるのは、その所属する会社の業績評定で悪い点を取って給料を下げられたくないと言う小市民根性が直接の動機であり、彼らの工夫の結果が人々に役立つかどうかなどおよそ頭にない。

極言すれば、思いつきが役に立たずに捨てられようが給料と地位さえ上がれば万歳、そう言うごさかしい世界に一億人が全員生きていて、それ自体はミクロ的には極めて非人間的であるけれども、マクロ社会としては最大効率になっているのだ。そしてこの最大効率を極限まで追求しようと言うのが安倍政権の「全員活躍社会」である。そもそも効率とやりがいは全く無関係なので、原理的に両立するはずがない。どうして「全員働け」社会とか「国民皆兵」社会等と正直に言わないのか。

ところでこの「全員評定社会」だが、特に大学関係者から「今のよう目先の業績重視では、息の長いあるいは冒険的な研究はできなくて、いずれノーベル賞の取れない国になる」との危惧が提示されている。ここ最近良くノーベル賞が取れているのも、実はこの「ノーベル賞の小粒化」と関係があり、この危惧は正しい。実際長期的視点に立つならば、一億人を2群に分けて、その一群には遊軍的な自由研究あるいは自由仕事をやらせた方が、より多様な成果が出て長期的には国や世界が栄えるだろう。評定社会で稲作に匹敵する革命が起こるなどとはおよそ思えない。全員が小市民、プチブルになるだけだ。

ただ問題は、どうやって全員を不公平なく2群に分けるのか、そして特に遊軍に分けられた側の人の「成果」をどう評価するかという問題だ。昔は「大学教授と坊主は3日やったら辞められない」と言われた。また高校教師は長い夏休みを利用して地元密着の自主研究や海外登山とかにチャレンジしたりしていた。そして彼らのいくばくかはそ

## 瞑想録(その9)

れなりに「偉大な」業績を打ち出してきた。これも事実である。だが彼ら「3日組」の大多数はその身分にあぐらをかいて、ひたすらに安楽をむさぼってきた。「雨の日は決まって休講」と言う教授はどここの大学にも居た。

ところが今の全員高学歴社会では、こう言う不公平は社会正義として許されなくなっているのだ。誰だって楽しくて楽な方が良いに決まっていて、抜け駆けする奴は許せない。その結果として必然的に行き着くところが全員平等の評定社会と言うことになる。私はまだ多くの文明の興亡史をよく調べてはいないが、この手の単色的効率至上主義も文明を滅ぼす要因の一つだったのではないかと思っている。

だが全員参加と自由平等博愛は、たとえつまらなくても、また滅亡に向かう道であろうとも、民主主義の基本だ。そしてその基本はキリスト教の「1人は万人のために、万人は1人のために」である。これが現在の世界標準なのだ。この言葉は一見聞こえが良いが、実は「1人は万人の奴隷、万人は1人の奴隷」と全く同義である。とどのつまりが「全員働け」と言う訳だ。まあ世の中もはやアインシュタインほどの発見はされつくされていて、あとは「遺伝子科学とか宇宙開発と言っても天才など必要ない時代だ」と言う声も聞こえるが。

和魂洋才の日本にあっても悪平等の最大効率を守らないといけないのか。もちろん社畜さんたちには感謝しているが、もっと融通と余裕と多様性のある社会を、おもてなしの心で日本が発信しても良いと思う。と言っても私自身も、まだこれと言ったアイデアがある訳ではないが。ただ、今のままでは全員がたがいに潰し合っている。まさにキリスト教のユートピアであり末世だ。チ～ン、ナムナム……。

2015. 11, 01